アムネシアのリコ

イロル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アムネシアのリコ

【Ｎコード】
Ｎ４４９５Ｅ

【作者名】
イロル

【あらすじ】
二海佑介は七雲高校二年生。新しい自分になるため、終業式からアルバイトを始める佑介。バイト先での新たな出会い等もありつつ、何かが起こりそうな気配を感じるが……今年の夏休み、佑介は今までとは違う夏を体験する。

序章「ボーイ・ミーツ・ガール」

序章「ボーイ・ミーツ・ガール」

晴れ渡る青空を、青色の自転車が物凄いスピードで下っていく。

駅前に向かう自転車は、暖かくなり始めた陽気を振り払いながら、坂道でついた勢いのままに大通りの交差点を通り抜けていく。

交差点ではたくさんの人だかりができているが、自転車は勢いを殺さず、人と人の隙間を縫うように通り抜けていく。何故なら、その自転車にはそんな時間は無いのだった。

（目覚まし時計が壊れていましたって、遅刻の理由にならないよな……）

自転車の操縦主である　二海佑介（ふたみ・ゆうすけ）高校二年生は、今まで自転車で出したことのない様なスピードで、アルバイト先である『喫茶加藤』へと向かっていた。

佑介は時計をちらりと見るが、もうどれだけ急いでも間に合わない事がわかっている。朝の十一時といえば、すでに飲食店にとっては客入りのいい時間だろう。

昨日から始まった『喫茶加藤』でのアルバイトも今日で二日目。初めての遅刻をする時期としては、最も悪いタイミングなのではないだろうか。佑介は今までアルバイトの経験は無かったが、なんとなく、いや、ひしひしと、自分のしてしまった失態のリスクを感じ始めていた。

現在進行形で佑介を脅かす悪魔が、自分の臀部に潜んでいた。そしてその正体は、ジーンズの後ろポケットに滑り込ませた『携帯電話』だった。

今朝は壊れた目覚まし時計の代わりに、佑介を振動で起こしてくれた携帯電話だったが、その救世主が今度は疫病神として佑介に憑きまとう。振動回数は三桁にまで上り、次第に周期の間隔が短くなって、大地震の余震の様に何度でも佑介を怖がらせる。

しかし一番怖いことは、この後起こると予測されるバイト先の店長の怒りだった。

目の前に、この町唯一の駅である『七雲(なぐも)駅』が見えた所で、佑介は最後の力を振り絞る。目の前にある自転車置き場に向かって、佑介はその身体ごと突っ込ませた。

慌てて自転車に鍵を閉めて、切符売り場に駆け込み、財布を鞄から取り出して、『伊野部(いのべ)駅』までの丁度の金額二二〇円を券売機に放り込んでいく。少しの機械音の後に出てくる切符を、ひったくる様に引き抜き、改札の車掌さんに向けようとした、その時だった。

佑介の身体を物凄い衝撃が襲い、甲高い声が小さな駅の改札口に広がった。

「いったぁぁあぁぁい！！」「いってぇぇぇぇ……」

佑介は身体を起こすと、声の主だと思われる中学生位の少女が、改札を挟んで同じように身体を横たえているのが見えた。何で今日はこんなについてないんだよ……と佑介は心の中で呟いた。

地面に落としてしまった切符を拾った佑介は、謝ろうと思い膝を

立てて体勢を立て直すと、目線の先にある電光掲示板が『まもなく発車します』という文字をスクロールさせているのが見えた。その瞬間、佑介の中で、少女を思う両親が弾け、改札を振り返ることもせずにホームへと駆け出した。背後から非難めいた声が聞こえてくるが、佑介は耳に栓をして走り抜ける。

佑介は、（ごめんなさい、ごめんなさい、神様許してください……）と心の中で呟きながら、今すぐにでも走り出しそうな電車の中に、あと少しの所で乗り込むことができた。今まで走り続けていたせいか、佑介の足はガタガタと震えだし、電車の床に崩れるようにへたり込んだ。佑介は周囲の人の目が、怪訝そうな色合いで自分に向けられている事には気づいていない。

やっと落ち着けると思った佑介は、ふぅーと大きく安堵のため息を吐く。

が、すぐに『携帯電話の振動』は自分の立場、状況を改めて佑介に突きつけていた。

ポケットからストラップを引っ張り出して、携帯電話を引き抜く。折りたたみ式であるソレを開くと、現在進行形で『ＣＡＬＬＩＮＧ』と表示している。佑介は恐る恐る画面を見つめると、その番号は自分が面接の時にかけた番号とは違う、しかも登録されていない番号から掛かってきていた。佑介はこの番号が、アルバイトと無関係ではないと思ったが、お先真っ暗な今の状況を打開する、『一つの光明』と信じて、その着信を受ける事にした。

『もしもし……二海佑介の携帯ですが……』

佑介は明らかに脅えきった声で電話にでると、電話の奥で騒がしい声があがってた。

（失敗だったか……）と思わず肩を落としてしまう。と、次の瞬間に優しい声が聞こえてきた。

『もしもし二海君？　もしかして何かに巻き込まれたとか？　怪我とかしてない？　よかったーやっと出てくれてよかったよ……店のみんな凄く心配していたんだからね！』

佑介は思わず呆気に取られてしまうが、畳み掛けられていく言葉に肩の力が抜けた。しかし、寝坊で遅刻している事を、言い辛い状況になってしまったのではないか？　と佑介は思った。

『遅刻してすいませんでした……もしかしてなんですけど、彩島（さやじま）先輩ですか？』

『私の声覚えてくれたんだ、その彩島先輩ですよ。今日って君入ってたよね、その感じからすると、もしかして寝坊とか？』

そんな小さな心配を容赦なく叩き切った佑介の電話の相手　彩島（さやじま）真奈香（まなか）は、佑介のバイト先の先輩でもあり、高校の先輩でもある。佑介は昨日のバイトで始めて彩島と会い、彩島は教育係として色々な仕事を優しく教えた。佑介は先輩に延々と電話を掛けさせていた事に気づいた。

『すぐ電話に出なくてごめんなさい……二〇分後には着きます。本当にすいませんでした……』

『うーん、まあそんな感じで店長にも謝ったらどうかな？　うちの店長はケジメつけた態度が大切だっていつも言ってるから、誠意もって謝ってみたら大丈夫だよ！』

彩島は電話先で、くすっ、と小さく笑っている。その声に反応してか、いつの間にか佑介は顔が赤く染まってしまっていた。佑介は

自分が床に座っていることが恥ずかしくなり、急いで立ち上がると、目の前にあるガラスに映っている、シャツとジーンズを着たの自分を凝視した。

シャツの襟は捻じ曲がり、髪型は受けた風のせいでぐしゃぐしゃ。全汗腺からの大量の汗で、服が全体的に湿っている。佑介は項垂れながら、こんな状態で先輩に会いたくないと思った。

『じゃあ、店で待ってるからねっ』と彩島が言う。

『――、はい。ありがとうございました……』

佑介は携帯電話を切ってズボンに仕舞った。佑介はシャツのボタンを少し外して、電車のクーラーの辺りに近づいてみたが、電車が駅に着くまでに服は乾くことがなかった。

今の季節は『夏』。佑介が住んでいる町は列島の南方にある島国の小さな町で、そこら辺の夏とは一味も二味も暑かった。今日、佑介は平日にも関わらず学校にも行かないで、アルバイト先に向かっている。それが許されているのは、この島が夏休みに入っているからだ。

「夏休み始まって、一日目でこれかよ……」

伊野部駅に着いて電車を下りると、すでに時計は十一時二〇分を回っていた。

急いで全自動改札に駆け込み切符を通すと、切符は何故か返ってきて、更に前のシャッターは『ここは通すまい』と立ちふさがり、突っ込んだ佑介は反動で身体が改札の手前に返された。

「いってて、なんでだよ……」そう言って返ってきた切符を見ると、

この切符が自分が買った切符とは違うことがわかった。そして、その切符が女の子の持っていた切符だと気がついた。

さすがに神様は見ているよな……と思い、佑介は機械で差分の金額を清算した。

駅から出ると、車道を挟んだ奥のほうに『喫茶加藤』が見えた。

すぐに走って渡ってしまいたかった佑介だが、休日の昼ごろの道路交通はそんなに生易しくない。信号機無しの横断歩道を『はい、どうぞ』と、渡らせてくれる心の広いドライバーを待っていたら、佑介は四、五分足止めされるだろう。（――今だっ！！）

車間距離が多めに空いた瞬間を見つけた佑介は、身体に残った力を遣いきる勢いで駆けだす。それを見たドライバーも少し減速してくれたのか、佑介は危なげなく渡り切ることが出来た。

――しかしその瞬間、物凄く大きなクラクションが後方で響き渡った。

自分に向けて放たれたと勘違いした佑介は慌てて振り返ると、そこには道路上でへたり込む少女が、今まさにトラックに轢かれそうになっていた。

その少女を見た瞬間に佑介は、『助けなければいけない！』という思考に縛られた。

佑介はそのまま車道に駆け込み、左目にトラックの光を感じながらも、真っ直ぐに少女の命を見つめて、少女の身体を抱え込んでそのまま奥にある歩道目掛けて、飛び込んだ。

しかし、勢いは消えないで、身体は回転しながら更に置くの塀にぶ

つかった。佑介の意識が脳震盪を起こしたかのように、ぐにゃりと捻じ曲がった。そう思わせる位の衝撃を、佑介は頭に受けていた。

二人の周りは『大丈夫か？』『自殺？』『やだ、こわーい』等、好き勝手に言っている。佑介はそんな事言ってないで救急車呼んでくれと叫びたかったが、意識がしっかりしていないせいか声が上手く出せなかった。声を出そうとすると、腹筋等の色々な筋肉が痙攣する。

交通は渋滞し始め、車のクラクションが騒音お構い無しで鳴り響く。その中で一つ、救急車のサイレンが次第に近づいてきた。それを聞いた佑介は身体から少し力が抜けた。そして救急車が近くに止まり、救急隊員が二人に駆け寄った。

「大丈夫ですか？怪我はありませんか？」　担架の準備をしながら質問する隊員の声は、少し焦った様子を浮かべている。大丈夫ですよ！　と答えたかったが、如何せん声が出ない。

「こっちの女の子の方が重体だ……」一人の隊員がぼそりと呟いた。

―――女の子！　意識が動転していたせいで、佑介は何のために道路に飛び込んだのか忘れていた。佑介は目を開いて、両腕でしっかりと抱いている女の子の事をよく見た。白く透明感のある肌に頭から垂れ下がってきた血が、枝分かれして顔を流れている。

血が、頭から滴る血が、忘れかけていた風景を、佑介の頭の中に深く流し込んだ。

佑介の視界が血の赤に染まっていく。意識が赤黒い暗闇に染まっていく。

そのまま佑介はその少女と同じような姿で、コンクリートにその

身体を横たえた。

それが二海佑介と、まだ名前もわからない少女の、最初の出会いだった。

第一章「ザ・ファースト・タイム」前編

第一章　ザ・ファースト・タイム

1

誰かが俺を呼んでいる。

目の前に写る光景は、昔何度もうなされた、『あの夢』と同じだった。

大きな炎が、目の前にあり、目下には人の亡き骸が転がっている。それは昔見た夢と同じ状況であって、だからこそその亡き骸の名前が、俺にはわかった。

『お兄ちゃん……、何で私は助けてくれなかったの……』と、その亡き骸は俺に訴える。

久しぶりに見るその亡き骸は、俺の妹　『二海晶子（ふたみ・しょうこ）』のものだ。俺が中学生の時、目の前で交通事故に遭った妹を、俺は助けることができずに、呆然と立ち尽くしていた。

夢はいつも、妹が車に轢かれる瞬間に始まる。夢を見初めた頃は何度も助けれない事がわかっていても、何度も助けようと思い、その度に絶望した。

俺にとって妹は、家族の中で一番信頼できる存在で、一番の友人だった。

昔から、親の転勤で転校ばかりしていた俺は、仲良くなった友達をすぐ失うという事を繰り返した。それだけが原因かはわからないけれど、俺には親友と呼べる存在はいない。

だから、妹を失った瞬間に、俺はすべてを失って、すべてに絶望したんだ。

『お兄ちゃん、どうして私は助けてくれなかったの……』と、妹が泣きぐずった声で呟く。

『ごめん……俺がふがいないから、助けてやれなかったんだ……』

周りの色が赤い炎の色に染まり、次第に妹の声は聞こえなくなっていく。

そして、夢の終わりを告げるかの様に、辺りの光は力を失い、すべては闇に消えていった。

2

ベッドに横になっていた佑介は、薄らと目を開いた。少しくすんだ茶色の天井や、ふんわりと香る何かの匂い。そして、ベッドが一部屋に四台もあるのを見て、佑介はふと考える

「もしかして俺、入院してる？」　と、周りから見たらおかしな子と思われるような発言をした。

窓は真っ白いカーテンで遮られ、光はわずかにカーテンの隙間から漏れている。そのわずかな光だけが、部屋の中をオレンジがかった色に染め上げている。

そのオレンジ色を見て佑介はある事に気がついた。

佑介は慌てて携帯をポケットから取り出そうとするが、入っていない。よく探すと、財布も鍵も、持ち物全てが無い事がわかった。

しかし、佑介の頭の中にはアルバイト先の事が一杯になっていた。時計をしていない佑介は、陽の具合から夕方の４時から5時くらいだろうと思った。お昼の時間帯が終わって、今は夜の準備をしているところだろうか。

（早く誰かを呼ばないと）　テレビでよく見る『ナースコール』がベッドのどこかにあるはずと思い、枕元をごそごそと探した。すると、若い看護婦が病室に現れた。

「二海さん、どうかされましたか？」と、看護婦はベッドに駆け寄った。年齢は二十代前半で、黒髪をポニーテールに纏めている。
「いや、あのナースコールを探していて……」と、佑介は説明した。
「ナースコール？　何か用事ですか？」　落ち着き払った看護婦は首をかしげた。
「えぇっと、僕の携帯電話って今どこにあるかわかりますか？」

看護婦さんを呼んで携帯電話がどこかと聞くのはおかしな気がするが、今の佑介にはそれどころじゃなかった。バイト先に遅刻するといっておきながら、４、５時間音沙汰なしっていうのは、とても不味いんじゃないだろうか、と佑介は思う。

「ああ、それなら検査のときに預からせてもらってるわよ、貴重品も含めてね」
「あのー、今すぐに返してもらえたりってできますか？　すぐにでも連絡しなければいけない所があって、それで……」「それってもしかして、『喫茶加藤』？」

看護婦の口から飛び出した思いがけない言葉に、佑介は驚いた。

（知っている理由はわからないけど、『加藤食堂』に今すぐ、本当に今すぐ電話しないと……）

「それだったら、何度もかかってきて五月蝿かったから、私が受けておいたわよ？　今から七雲総合病院で入院しますので少々お待ちくださいっ、て言ったわ。もしかして駄目だった？」

「――――――、ああ、ええっと、何て言えば良いのか……」

予想できない看護婦の発言に、佑介は何秒か思考停止してしまう。連絡しておいてくれた、という事なのだろうか……。

「うーん説明が足りなかったか、実を言うと私、君のバイト先『喫茶加藤』の店長の娘、『加藤優貴菜（かとう・ゆきな）』って言うんだよね」　またも思わぬ言葉が看護婦の口から現れた。

（店長の……娘？）

「事情は親父にしっかり説明しといたから大丈夫、多分。どうよ、納得した？」

「はぁ、そうですか……多少は納得しました」　佑介は呆然としながら答える。

多分、という言葉が非常に気になった佑介だったが、敢えて言わなかった。どのみち電話で何を話したところで、あっさり信用してもらう事はできない、と思ったからだ。

「何俯いてるのよ、大丈夫よ。人の命助けられる子を、親父は見捨てたりしないって」

「――えっと、あれ……人の命って、あれ？　何か、大切な事を忘れて、いる様な……」

頭の奥で何かが引っかかっている。その違和感のせいで、あと少しの何かが出てこない。

「もしかして忘れてるわけ？　まあ無理ないか。君も頭を強く打ったわけだし」

（頭を打った……ここに来る前は、店の前で車がいっぱいで……思い切って飛び出して、そうしたら後ろでクラクションが……それで轢かれそう少女が）

「あの女の子はっ、あの女の子は大丈夫なんでッテ、イテテテテ……」急に頭を痛みが襲う。

「ちょっと、君も一応ここの病院に入院しているんだから。もう少し気をつけて」

「いたた、すいません……加藤さん、君もっていう事は、彼女も入院してるんですか？」

加藤は佑介の激しい食いつきに、やれやれ、という表情をするが。にこりと笑い、

「ええ、彼女も入院しているから安心しなさい。あなたは彼女の命の恩人なんだから、もっと誇らしげにしてなさいよ」

「入院しているって事は、無事だったんですね……よかったです……」

それを聞いた佑介は、安堵の声を漏らした。が、優貴奈は何か不満げそうな顔だ。

「君さ、自分の容態については気にならないわけ？」「あ、特には気にならないです……」

「まあいっか、実際大した事ない怪我だし……後、私の事は『優貴

菜』って呼んでもらえる？」
「あ、はい……優貴菜さんでいいですか？」
「君十七歳なんでしょ？　もっと若々しくはしゃいだりしないの？　辛気臭くなっちゃって」
「はい、すいません。若くないってよく言われます……それで、すぐにでも会えるんですか？」

佑介がそう言うと、ゆきなはチッチッチッと言いながら指を左右に振った。

「それはちょっとできないんだよね？　あの子はまだ検査中。君は明日から診察、以上！」
「さすがにまだ無理ですよね……」と言って佑介はため息をついた。
「まあ明日の朝の検査をしっかりと受けるために、今日はゆっくりしてなさい。そうしたら明日か明後日には、必ずあなたに会わせてあげる。約束するわ！」

そう言って、優貴菜は病室から出て行った。
急に静かになる病室。カーテンの隙間から窓の外を見ると、もう真っ暗になっている。

「この時期にいきなり事故とかに遭う奴ってどれだけいるんだろ……」と佑介は呟いた。
夏休みの初日に羽目を外して、気の緩んだ所で交通事故に遭う。これじゃあ小学生と一緒だ。

そんな事を考えていると、いつの間にか夕食の時間になった。現れた病院食を見て、佑介は、昨夜彩島先輩に食べさせてもらった賄いのカレーが思い浮かんだ。あれは病み付きになる味だ。

「一応私はあなたの担当看護婦なんで、ご飯しっかり食べてくださいね？」と優貴菜。

昨日の賄いと比べてしまった事を見抜いたのか、優貴菜は佑介をにっこりと睨みつけながら、部屋を出て行った。

真っ白な個室のベッドの上で胡坐を掻いて病院食を食べる。夏休みの思い出企画として、これほどなまでに残念なツアーはこの世に他に存在しないんじゃないかと、佑介は思った。

「はは、ははは、はぁ……何してるんだろ俺……」

――――――ぐぅぅぅぅぅ、と間抜けな音が部屋に響き渡る。

（まあ、空腹は最高のスパイスって言うし……）　そう思い直した佑介は割り箸を手に取った。

食べ始めると意外と美味しいという事がわかり、佑介は勢いよく膳の上に載った全ての食材を食べきることができた。最後は米粒一つすら逃さずに、食器をしゃぶり倒した。

「意外とやればできるな、俺……」　病院飯というものを食べたことの無かった佑介は、食わず嫌いというのはいけないなと、当たり前の事を再確認した。

すると病室の扉が三回優しくノックされた。

「あのー、失礼しまーす……」　前方にある扉が開いて、彩島が現れた。

「えっ、さ、彩島先輩？　あ、あの……遅刻してすいませんでしたッテ、いってぇぇ……」

肩が露出したラフなTシャツ姿の鮮島に佑介は慌てふためき、更に頭を下げた反動で、ひざ上にあった食事用の机に頭を叩きつけた。
「ちょっと、慌て過ぎだよ！　今日はお土産持ってきたんだよ、喜んでくれる？」

彩島はセミロングの髪を少し茶色く染めていて、服で縁取られた輪郭から判る位にスタイルがよかった。佑介が聞いた先輩の噂では、成績優秀、文武両道、容姿端麗で、全校生徒の憧れの的らしい。そんな先輩が昨日知り合ったばかりの後輩に、お見舞いに来てくれているという事が、佑介には奇跡の様にも思えた。

「二海君大丈夫？　顔がすごく赤いよ？」そう言って彩島は佑介のベッドの方に近寄る。
「いや、だっダイジョウブなんで、あの、はい、熱とかないんで……」
「そう、なの？　それならいいんだけど。お土産なんだけどね、ちょっと待ってね」

そう言うと、彩島は両手で持っていた紙袋からお重の様な物を取り出した。

「彩島先輩、それってもしかして――――」「そう、多分その予想は外れてないと思うな！」

彩島はお重を机の上に置くと、じゃーーーんと言ってその蓋を開けた。

「昨日気に入ってくれた彩島真奈香特製、秘蔵の一品入りスペシャ

ル賄いカレーです！」
「あああああああ、やっぱりそう来てましたか！」　佑介はベッドから飛び起きる。
「店長がね、病院食だけじゃ物足りないだろうからって、持っていってやれって言われたの」
「店長が？　あのー店長怒ってますよね？　相当……」と、さりげなく店長の機嫌を伺う。
「うーん、褒めてたよ？　うちの息子と交換したいとか言ってたかも。二海君お気に入りだよ」

笑顔でそう言う彩島先輩を信じられない訳ではないけれど、佑介はにわかに信じることができなかった。あの怖そうな店長が俺の事をそんな風に言っている事を、想像することができなかった。

「さーさ、早く食べちゃってよ！　カレーは温かいうちが一番！」
「あ、はい……いただきます！！」と、さっき夕飯食べたんでと言えない佑介は、がつがつとカレーに食って掛かっていった。さすがの賄いボリューム。食べても食べても底を見せない。

「元気そうで良かったよ……じゃあ、そろそろ家の人から電話がかかってくるから行くね？」
「あっ、ふぁい、ひょうは、ふぅいませんでした本当に……、あとお見舞いありがとうございます……」佑介は口の中の米粒を流し込んで、なんとか重を空にした。
「明日取りに来る予定だったんだけどな、これだと今日持って帰れちゃうね？」

明日も彩島に会えるチャンスを自分から潰してしまった事を、佑介は膨れ上がったお腹と一緒に呪った。

「また来てもらうのも大変だと思うんで、色々迷惑かけましたし……」
そっか、と言って彩島先輩は紙袋にお重をしまって、部屋の扉に手をかけた。
「じゃあね。お店で待ってるから、私の手料理食べて元気出して、早く退院してね！」

寂しそうに部屋を出て行く彩島に、佑介は気づくことはなかった。むしろ今日一日を満点にしてくれる人物の登場人物にただ、心を躍らせていた。
部屋がまたしてもしーんとする。
人は静かな部屋にいると、頭の中で色々な事を考えてしまうが、佑介も同じで、ふと頭に浮かんできた、今日の出来事を思い返していた。

「どんな顔してたっけな……」

自分が助け出した少女。その顔も服装も、何もかも覚えていない。一瞬の出来事だったからというのもあるんだろうが、何も覚えていないことが、更に佑介の興味を誘っていた。

拓朗。お前の言った通り、一回踏み外したレールからは、なかなか元に戻れないみたいだ。
佑介はゆっくりと目を閉じた。

3

カーテンの開かれた窓から、暖かな日差しが差し込む。

佑介は眩しい光を遮るように、寝相の様な動きで掛け布団を顔に被せた。が、担当看護婦である加藤優貴菜に、すぐにその掛け布団を剥ぎ取られた。その一挙手一投足は物凄く手馴れた風だ。

「はいはい、朝だから起きるっ！　今日は朝食の後に検査があるんだから……って」

優貴菜がベッドに視線を戻す。佑介は枕にしがみついて、全く何も無かったかのように、睡眠をとっていた。そして、佑介の幸せそうな寝顔が優貴菜の感情を逆撫でした。

「起きろって言ってんだろがぁぁぁっ！」　とゆきなは絶叫しながら、枕にしがみつく佑介を叩き起こした。

「――っぐ、お、おはよう、ございます、優貴菜さん」

「おはようございますっ！　君もしかして目覚め悪い？　弟を叩き起こしてた頃思い出しちゃってさ、ごめんごめん」　優貴菜は笑いながらそう言ったが、佑介は苦笑いをした。

「あの、起こされたって事は今から診察があるんですか？」佑介は寝ぼけた頭でそう言うと。

「そうだよ？　これから鷲木先生の所で診察してもらうから、早く朝ごはん食べてね」

検査という響きから、何か大きな機械を使って調べたりするのかと思ったが、違うらしい。

「じゃあこっちの準備ができたら呼ぶから、それまでゆっくりしてて」

「あのっ！」

優貴菜は、突然出た佑介の大声にびっくりして両肩がびくっと吊上がった。

「病院だから、大声禁止！　で、一体何よ？」

「ごめんなさい、思わず大きくなってしまって、あの子には今日会えそうなんですか？」

佑介はずっとその事が頭から離れず、余り寝ることができていなかった。

「うーん、言っていいのかねー。一応秘密事項なんだけど、君ならいっか。相当気になってるみたいだし」

優貴菜は指を顎にあてながら、一人納得したように頷いている

「昨日まであの子意識がなかったんだよ。だから今、やっと鷲木先生が診てるのよ」

優貴菜の口から聞かされる事実に、佑介は口が開いたまま固まってしまった。

つくづくこの人は俺を驚かせるのが好きみたいだと、佑介は思った。

「じゃあ俺が助け出した時は、本当は危険な状態だったんですか？」

「うーん、頭はとても大切な場所でしょ？　君もそうだけど、頭っていうのはちょっとの事でも、『もしかした時』の為に検査はしっかりしておいた方がいいわけ。あの子は結構大事な場所を打っちゃ

ってたみたいでさ、そのせいで意識の回復が遅いのよ。」

あの場面で咄嗟に身体から抱えていったことは間違いだったのかと、佑介は思った。

「だから会うのは今の検査が終わってからだから。うーん、あなたの検査が終わる頃に終わってるだろうから、いい結果だったら会わせてあげるわよ」

優貴菜は少し物騒なことを言って、病室から出て行った。（悪い結果ってなんですか……）

佑介は何をしてもしょうがないと思い、布団の中に潜り込んだ。昨日からシーツが変わっていないからか、少し湿っぽい。

（そういえば、俺着替えとかどうしよう、持ってきてないぞ……）

と、昨日のままの服だという事に、佑介はやっと気づいた。

『二海佑介さぁん、次の診察なので準備してお待ちください』と、放送が聞こえたので、佑介はベッドの上から降りようと、久しぶりの地面を恐る恐る踏みしめた。

「いたたたたた、あれっイテテテテテテテ……」　佑介は筋肉痛の痛みを全身に感じ、ベッドに逆戻りしてしまった。この痛さは何なのだろうと、しびれた体をさすってみる。

「それは貴方が危機に際して、物凄い火事場の馬鹿力で彼女を助けたときの反動ですよ？」

「うわっ！」　背後からの急な声に、佑介は声を出して驚いた。

「驚かせてすいません。私はこの病院の脳外科医、『鷲木（わしぎ）』と申し

ます。貴方の担当医をさせてもらっています、よろしくお願いしますね」

鷲木と名乗る若い医師は、握手を求めているのかの様に右手を開いて佑介に向けた。

「簡単なテストをしましょう。貴方はこの右手を見てどう感じましたか？　思ったとおりに、私に反応してみてください」　鷲木は少し頬を緩めながらそう言った。

「あー、はい、じゃあ言うとおりに……」　佑介は鷲木の右手と握手をした。

「ほー、なるほど。少し貴方の事がわかった気がします、じゃあ診察室まで行きましょうか」

そう言って鷲木は、握った手をそのまま引っ張って、佑介を診察室まで連れて行った。

当然、佑介は全身に走る痛みを我慢しながら、診察室まで歩いたということである。

（ここの病院の人達、みんなおかしいよ……）　と、佑介は心の中で文句を言った。

診察室に着いて回転椅子に座るなり、鷲木はふぅーっと息を吐いた。そして、

「診察と言われたと思うんですけど、実は貴方の診察はもう終わっています。検査の結果も良好。後、貴方にいくつか質問したいこと

があるので、それで診察は終わりです」

鷲木は微笑みながら言った。

「質問をするので、正直に答えてください。とは言いますが、肩の力は抜いてもらっていいですよ？」

笑いながらも鷲木はとても真剣な表情で佑介の目を見つめ、先程までのとは違う雰囲気で聞いた。それにつられて、佑介もゆっくりと真剣な表情で頷いた。

「では聞きますね、あなたは自分の助けた女の子について、何か知っていますか？」

「えっと、助けた時はとても驚いていたので、知っているかどうかはわかりません……」

鷲木はカルテに、佑介のスピードに合わせてボールペンをサラサラと動かしていく。

「――、なるほど。では顔を見せたらわかりますか？」　そう言って鷲木は一枚の写真を取り出す。そこには目を閉じた状態の少女の顔が写っていた。

「覚えてません……あの、その質問と僕の診察とどういう関係があるんですか？」

「関係ですか、そうですね」　鷲木は頭をぽりぽりと掻いて、何かを考えている。しばらくすると、ふぅーっとため息をついて、もう一度佑介に向き直った。

「まどろっこしいのは嫌いなので、単刀直入に言いますが――彼女は今、これまで生きてきた思い出を蓄積した記憶を、思い出すことができない、という事。更に言えば、彼女は身分証明をする物を何

一つ持っていない、この事がわかりますか？」

佑介は思わず絶句する。鷲木から放たれる言葉の数々に、ただ息を呑んでしまう。

「要するにですね、彼女は自分が誰なのかわからない。そして私たちも彼女が誰なのかわからない、最後に命の恩人である貴方も、それを知らなかったという事になります」

「――、記憶喪失っていう事ですか？」　佑介は自分が分かる範囲のことを、辛うじて口にした。

「簡単に言うとそういう事になります。今日目覚めたばかりの彼女は、自分の事や今日までの事に関して、何を質問しても答える事はできませんでした。最後の頼みとして、貴方に頼ってはみたのですが、僕の勘は外れてしまったみたいですね……」　鷲木はやれやれです、という感じの表情をしている。

「これで貴方の検査は終わりです、お疲れ様でした。一応今日だけは様子見という事で入院していていただけますか？　もちろん明日になったら退院していただいて結構です」

すると、コンコンというノックの後、ゆきなが診察室の中に現れた。

「じゃあいきましょっか。二海さん、昨日からずっと気になっていたんですよ？」とゆきな。

「はい、自分が助けた女の子を退院する前に会っておきたいです。」

診察室を出て、ゆきなに案内される佑介だったが、佑介は「すいません、一つだけお願い聞いてもらえますか？」と言って、シャ

ワー室を貸してもらった。

佑介はシャワー室の中で、どういう顔で何て言ってあげればいいんだろうと、考えていた。

（俺は君の命を救ったのかもしれないけど、それと引き換えに記憶を……）

全く知り合いではなくて、命は救われたのかもしれないけれど、家族もわからない、自分もわからない。（そんな子に俺は何て……）

考えたら考えただけ混乱してしまいそうだったので、佑介は手早く体と髪を洗って、シャワー室をでた。更衣室には、俺の着替えと思われる衣類とバスタオルが置いてあった。（誰がこんなの用意してくれたんだろ、しかも、サイズもぴったりだ……）などと考えながら、急いでそれに袖を通す。

更衣室を出ると、優貴菜は腕を組んで待ちくたびれた様な表情をしていた。

「まあ、早い方ね。その服だけど、君の実家から送られてきたわよ。君の両親は遠くに住んでるのね、住所見たらすっごく遠くでびっくりしたわ」と、余り驚いていない顔で言った。

「家からって、実家に連絡したんですか！？あの、何か言ってましたか？」

「まあ昨日君の家に連絡したときに、『大丈夫だったのか？』って聞かれたわよ？」

優貴菜はその時の事を思い出しているのか、人差し指をこめかみに当てている。

「それだけでしたか？　こっちに様子を見に来るとかは言ってないですか？」

「こっちも大した事は無いって言っちゃったからさ、仕事が忙しくて来れないって言われたわ」

「そうですか、両親はいつも忙しいんでしょうがないですね……」

佑介が少しがっかりしたと思ったのか、優貴菜は、「じゃあ、今度実家帰ったときに、文句言って何かおごってもらいなさいよ、『何でお見舞いに来てくれなかったんだよ！！』　ってさ」と言った。

「入院費とか出してもらってると思うんで、それはやめときます……」　佑介は笑っている。

「……あんた達、似てるわね。事故をしたのに、その当事者の両親が現れないなんて初めてよ。それに、二人同時になんて、おかしな話ね」　優貴菜は悲しそうな表情でそう言った。

「いいんです。俺あんまり親を喜ばせれない駄目息子なんで、しょうがないですよ」

佑介は「行きましょう」と言って、戸惑う優貴菜を引っ張っていった。

「気づきはしないかなと思って隣の部屋だったんだけど、ちょっとがっかりした？」

「いえ、がっかりとかは無いですけど、ちょっと驚きました」と佑介は言う。

「じゃあ、心の準備ができたら言ってね、何か感動のご対面みたいで私もどきどきしてきたわ」

優貴菜は佑介を置いて、勝手に盛り上がってしまっている様だ。

「だっ、大丈夫です、お願いします……」

「じゃあ開けるわよ、3、2、1――えいッ！！」

優貴菜の掛け声と共に開かれた扉の奥に、佑介は写真で見た少女と同じ顔を見た。

笑いかけるような表情の少女に、佑介は体が動かなくなった。

第一章「ザ・ファースト・タイム」後編

4

きれいに整えられた黒髪は透き通る様な艶を帯びていて、センターで分けられた髪は肩までの長さに伸びている。顔の輪郭はほっそりとして鋭く、とても綺麗なラインが縁取られている。

少女は半袖のパジャマを着ているが、その上からでも分かるくらいに、細い体つきだった。

「初めまして、私の命を助けて頂いて、本当にありがとうございました……」

少女は礼儀正しく、横にしていた身体を起こして頭を下げた。佑介はそれを受けた後、少し遅れ気味に頭を下げた。

「俺は、二海佑介って言います。あと、えーっと、何て言ったらいいのか」

「年上の君が落ち着かないでどうすんのよ……、はいはい、とにかく中入りなさいって」

優貴菜は佑介の背中を押して、無理やり部屋の中に入れた。

「じゃあ後はお若い二人で、どうぞお好きなように～」と言って、優貴菜は扉を閉めた。

「ちょっ、ちょっと。冗談はやめてくださいッテ！　開かない、本気ですか！」

「二海さん、ちょっと落ち着いて、一応病室なんですから」
年下の女の子に宥められた佑介は、顔を赤くしながら、備え付けの椅子に座った。

「あ、落ち着けなくてごめん。人見知りな性格で、ちょっと緊張しちゃって」
「そうですよね、初対面って緊張しますよね」少女は少し困ったよう表情をした。

(何て切り出せばいいんだろうか……早速変な印象を与えてしまった気がする……)

「あの、二海さん、って呼べばいいですか？　さっきはそう呼んでしまったんですけど……」少し恥ずかしがりながら少女がそう言うと、

「それで、大丈夫だよ」　と、佑介は答えた。

「私のせいで、二海さんを入院させてしまってごめんなさい、怪我の調子はどうですか？」
「俺は大丈夫。俺こそ君の事をしっかり助けてあげれなくてごめんね」　言いながら佑介は下を向いてしまう。少女はそんな佑介を見て、

「いえ、命を助けて頂いただけで、二海さんには感謝しています……」　と、言った。
「自分の事、何も覚えていないんだよね？」　途端に表情を曇らせ

て、こくりと頷く少女。

「はい、思い出そうとすると、何だか頭が痛くなるんです」

少女は頭を、両手で両側から押さえるている。

「無理して、思い出さないくてもいいからさ。後、俺がこの部屋にいると邪魔じゃないかな？」

さっきから年上らしい事が何もできなくて、佑介はそんな不安を抱え始めていた。

「そんなことないですっ、何ていうか、看護婦さんやお医者さんと話すより、安心します。だから、二海さんが邪魔なんて、そんなこと思ってないです……」　少女は体を乗り出して否定した。

「そう、じゃあいいんだけど」と、佑介は恥ずかしそうにポリポリと顔を掻いた。

「あっ、はい。いてくれて、大丈夫です」　少女は目線を自分の足元に泳がせて、少しおどおどしている。二人の間に何だか分からない、緊張感が行き来した。

「えーっと、約束はできないんだけど、記憶、絶対思い出せると思うよ」

「はい、そうですよね。いつかは思い出せますよね」　少女は屈託の無い笑顔を見せた。

「実は退院するのはすぐにでもいいらしいんです。この記憶喪失も一時的なショックで、病院もたまに通えばいい位だそうです……」

少女は窓の外を見ながら、そう言った。

笑ってはいるけれど、本当は泣きたくてしょうがないんじゃないだろうか、と佑介は思った。

「俺も怪我は大した事なくてさ、実は明日で退院していいらしいんだ」

「え、そうなんですか？　じゃあ私、明日から一人ぼっちになっちゃいますね……」

少女は残念そうな表情をして、両手を握り合わせた。

「えっと、記憶が戻ったらさ。友達とか、家族とか、来てくれるんじゃないのかな？」と、傷つけてしまったと思った佑介は、自信なさ気に少女を励ました。

「……友達、家族、ですか。そうですよね、私、忘れているだけで、この世界で一人じゃないんですよね。ごめんなさい、頭ではわかってても、実感がないんです。私はこの世界で孤独なんじゃないかって。目覚めてからずっと、心がからっぽなんです……」

「この世界で、一人ぼっちか……」

佑介は何かを考え出そうと、頭の中をぐるぐると回転させた。

「あ、落ち着けなくてごめん。人見知りな性格で、ちょっと緊張しちゃって」

「そうですよね、初対面って緊張しますよね」少女は少し困ったよう表情をした。

（何て切り出せばいいんだろうか……早速変な印象を与えてしまった気がする……）

「あの、二海さん、って呼べばいいですか？　さっきはそう呼んでしまったんですけど……」少し恥ずかしがりながら少女がそう言うと、

「それで、大丈夫だよ」　と、佑介は答えた。

「私のせいで、二海さんを入院させてしまってごめんなさい、怪我の調子はどうですか？」

「俺は大丈夫。俺こそ君の事をしっかり助けてあげれなくてごめんね」　言いながら佑介は下を向いてしまう。少女はそんな佑介を見て、

「いえ、命を助けて頂いただけで、二海さんには感謝しています……」　と、言った。

「自分の事、何も覚えていないんだよね？」　途端に表情を曇らせて、こくりと頷く少女。

「はい、思い出そうとすると、何だか頭が痛くなるんです」

少女は頭を、両手で両側から押さえるている。

「無理して、思い出さないくてもいいからさ。後、俺がこの部屋にいると邪魔じゃないかな？」

さっきから年上らしい事が何もできなくて、佑介はそんな不安を抱え始めていた。

「そんなことないですっ、何ていうか、看護婦さんやお医者さんと話すより、安心します。だから、二海さんが邪魔なんて、そんなこと思ってないです……」　少女は体を乗り出して否定した。

「そう、じゃあいいんだけど」と、佑介は恥ずかしそうにポリポリと顔を掻いた。

「あっ、はい。いてくれて、大丈夫です」　少女は目線を自分の足元に泳がせて、少しおどおどしている。二人の間に何だか分からない、緊張感が行き来した。

「えーっと、約束はできないんだけど、記憶、絶対思い出せると思うよ」

「はい、そうですよね。いつかは思い出せますよね」　少女は屈託の無い笑顔を見せた。

「実は退院するのはすぐにでもいいらしいんです。この記憶喪失も一時的なショックで、病院もたまに通えばいい位だそうです……」

少女は窓の外を見ながら、そう言った。

笑ってはいるけれど、本当は泣きたくてしょうがないんじゃないだろうか、と佑介は思った。

「俺も怪我は大した事なくてさ、実は明日で退院していいらしいんだ」

「え、そうなんですか？　じゃあ私、明日から一人ぼっちになっちゃいますね……」

少女は残念そうな表情をして、両手を握り合わせた。

「えっと、記憶が戻ったらさ。友達とか、家族とか、来てくれるんじゃないのかな？」と、傷つけてしまったと思った佑介は、自信なさ気に少女を励ました。

「……友達、家族、ですか。そうですよね、私、忘れているだけで、この世界で一人じゃないんですよね。ごめんなさい、頭ではわかってても、実感がないんです。私はこの世界で孤独なんじゃないかって。目覚めてからずっと、心がからっぽなんです……」

「この世界で、一人ぼっちか……」

佑介は何かを考え出そうと、頭の中をぐるぐると回転させた。

優貴菜は佑介が寝静まった後、記憶喪失の少女の部屋に向かった。コンコンとノックをする。

「加藤です、入るわよ……」　部屋に入ると、少女は夜中の十一時を回っているのにも関わらず、まだ電気をつけたまま起きていた。

「どうしたの？　頭が痛くて寝付けないとか？」　優貴菜が心配そうに聞くと、

「頭は痛くないです。でも、私には今名前がないんです。だから二海さんに、君としか呼んでもらえなくて、だから、名前だけでも思い出そうって、そうしたらこんな時間になってました」

「名前ねぇ……」　優貴菜は首をかしげて、ふむと相槌を打った。そして優貴菜は、

「じゃあさ、私があなたのニックネームつけてあげようか？　名前

は一つしかなくても、ニックネームなら何個あってもいいでしょ？
それに可愛いやつなら呼ばれたときに嬉しいわよ？」　と言った。

「あの、お願いします！　明日までに二海さんに教えないと、忘れちゃうかもしれないから」
「ちょっと待ってね、よっ、おらっ、うーー、んと、えいっ、あああああでてきた、こい！　こい！　こい！　きたーーーー！」　と、室内で優貴菜は絶叫した。

「行くわよ、準備はいい？」　少女はうんうんと頷きながら、その声に合わせて身構えた。
「思い出すって言う意味の英語『ＲＥＣＡＬＬ』からとって、『莉子』ってのはどう？かわいいでしょ」　優貴菜は自信満々にそう言うと、

「莉子、可愛いと思います。その名前、もらっていいですか？」
記憶喪失の少女改め、莉子は、輝くほどの笑顔で、優貴菜の目を見つめてそういった。

「おっう、眩しいッ！　眩しいからそんな輝く目で見つめないで、大丈夫よ、あなたにあげるから、だからこれからは思い出すまでの間、そう呼んでもらいなさい？」
「はいっ！」　莉子は元気に返事をした。

その後、莉子は布団にもぐると、一瞬のうちに眠りに就いた。
「『ＲＥＣＡＬＬ』からとって、莉子って、安直だったかな……まあ気に入ってくれたみたいだし」

病室の電気を消した後、優貴菜はそんな事を呟いた。

5

「ふわぁ、早かったわね、君が入院して、もう退院か～ふぁびしふなるふぁね～」
大きく欠伸をしながら優貴菜はそう言った。

「あの、欠伸をしながら言っても説得力ないですよ。三日しかいないんですから、早いに決まってますよ」　と、佑介は三日目にして優貴菜という人物との会話の仕方に慣れたようだ。

「あんたも言うようになったわね。あの子の前じゃ、がちがちのカッチカチになってた癖に」と、妖艶な笑みで優貴菜は言う。
「や、やめてくださいよ。ご飯食べ終わりましたから、診察室行ってきますね？」
「あら、あっさり。じゃあ一応形式だけだけど、先生と話してきてくださいね～」

佑介は病室を抜けて、診察室へ向かった。すると、目の前からパジャマ姿の莉子が歩いてきた。佑介は歩いている莉子を見て、身長は一五五センチ位だと思った。

「あ、二海さん、おはようございます。今日で退院ですね、おめでとうございます！」
「ありがとう、えーっと、そっか。名前はわからないんだっけ……」
「えっ、名前ですか……」　うつむく莉子。

「昨日、優貴菜さんに付けてもらった名前があるんですけど……」
莉子は顔を真っ赤にして、手を後ろに回してつま先を伸ばしたり、指先を擦り合わせたりしている。
「あだ名って事？　教えて！　俺も君の事、名前で呼びたいと思ってたんだ」
「本当ですか？　よかった……」　莉子は胸を撫で下ろした。そして莉子は勇気を出した。
「恥ずかしいんですけど、聞いてくれますか？」
「もちろん」　佑介が頷くと、莉子は気合を入れるように拳を握り締めた。そして、
「莉子、思い出すっていう意味の『ＲＥＣＡＬＬ』からとって、莉子です！」
予想外の大きな声に佑介は一瞬たじろぐが、
「莉子か、いい名前だね。これから莉子ちゃんって呼べばいいのかな……」
「えーっと、莉子って呼び捨てでも、いいですよ？」と本当に赤い顔になった莉子が、小さく言った。
「じゃあ、莉子って呼ぶよ。俺も名前のほうで呼んでもいいよ？」
「私もですか、二海さんがそういうなら……佑介さんって呼びます」
二人はお互いに恥ずかしい名前で呼び合って、ある意味お互いに自分の首を絞めていた。
「ゆうすけさぁぁぁぁん、いい加減診察室行きましょうねぇぇぇ

ええ」
会話が聞こえていたのだろうか。後ろから、段々と力が篭る優貴菜の声が聞こえてくる。
「すいまっせん！　今すぐ行きます、じゃあ、診察行ってきます。えーっと、莉子」
「いってらっしゃい……、ゆっ佑介さんっ！」
佑介は莉子の声に押される様に、診急いで察室まで向かった。

「いらっしゃい二海君！　遅かったですね？　もしかして、途中でオンナノコとバッタリ出くわして思わず立ち話なんか、したりしてました？」
「鷲木さんって、お医者さんなんですよね……、昨日は心理テストして、今度は読心術ですか……」
佑介は鷲木の多才さに、驚き呆れた。
「まあ趣味は多いですけどね。今日はあの子の抱えている症状の事を教えておこうと思いましてね、一応関係者ですから、お呼びした次第です」
「あの子の症状、ですか……」　佑介は一応という言葉が気になったが、話を進めた。
「はい、彼女の脳には検査の結果、何の外傷もありませんでした。なので、あなたが守りきれなかったことは、特に彼女の記憶喪失とは関係ありません。彼女の記憶喪失は心因性のものです」
「心因性っていうと、心の問題っていうことですか？」

「そうですね、彼女はもともと膨大なストレスを抱えて生活をしてきたのではないかと私は仮説を立てています。事故のときはきっかけに過ぎなかった。それほどまでに、彼女はいつ爆発してもおかしくないような、爆弾を抱えていたのかも知れません」　と鷲木。

「そんな風には見えなかったんですけど……」

「それは記憶喪失による一時的なものだと、私は考えています」

鷲木は目を細めて口元を歪ませる。佑介は、鷲木の言うことが想像できないでいた。

「彼女が事故に遭いそうになった場所を、覚えていますか？」

「道路、です。交通の激しい道路であの子は……もしかして、それって！」

佑介は事故の状況を思い出し、ある事を連想してしまった。

「はい。彼女はその場所に至るまでに、死にたいという想いを抱いていた可能性があります」

「あの子はとてもいい子で、そんな事を考える様には見えなかったんですけど」

「だから私は思うんです。彼女の家庭環境は最悪だったのではないか、彼女を元の家に戻すこと、彼女が記憶を取り戻すこと。それは、逆に彼女の命を殺してしまう行為になるのではないかと。これはただの推測ですけど、そんなに外れてはいないと、私は思っています」

「記憶を取り戻しても、取り留めた命をまた失ってしまう」　佑介はうなだれる。

「だから私は悩んでいるんですよ。これから彼女をどう扱っていこ

うか」
「……」　佑介は口をぎゅっと結んだ。
「一時的な居場所として、加藤さんの実家とかも考えていますし、記憶が戻る前にできるだけの事をしておきたいと思っています。貴方も彼女の生きる目的として、お見舞いに来てください。私は彼女を守りたいと思っている。だから貴方も協力してくれますか？」
とても真剣な口調の鷲木は、佑介を見てそう言った。
「わかりました。できる限りの事はしたいと思います」
「じゃあ、あなたの診察は終わりです。今日から夏休みに戻って、元気良く生活してくださいね」そう言って鷲木はにこりと笑った。
佑介は余り笑える心境ではなかったが、釣られて苦笑いをした。

「あっ、佑介さん、診察終わりました？」　病室を出るとすぐに莉子が駆けてきた。
「終わったよ、たいしたこと無かった。莉子は、今日も診察？」
「うーんと、朝のは終わりました。後、身体を少し動かした方がいいって言われました」
確かに病室のベッドで寝たきりでは、身体に悪いと佑介は思った。
「そっか、じゃあ優貴菜さんに許可をもらって、どこかに行かない？俺もちょっと身体が鈍っちゃってさ」
「えっ、私とですか？　あの私を連れて行ってくれるんですか？」

莉子は輝いた瞳で、佑介を下から見上げた。
「あ、うん。まあ知り合いは莉子しかいないわけだし……」
「じゃあお願いします！　どこかに連れてって下さい！」
佑介はわかったと言って、優貴菜がいるであろうナースステーションに向かった。
「あのー、加藤優貴菜さんっていう看護婦さんは、どこにいるかわかりますか？」
「ああ、優貴菜ちゃんだったら、さっき屋上にいったわよ？　洗濯物を干していると思うわ」
ナース長らしき５０位の女性は、優しく佑介に教えた。
「ありがとうございます、ちょっと探してきます！」
佑介は屋上に向かって駆け出した。

「屋上って言われても、行った事はないんだけど……」　闇雲に歩いていると、壁に病院の地図が書かれたプレートがあった。それの通りに進んで行くと、一〇分ほど歩いた結果、屋上に辿り着くことができた。
「優貴菜さんっ！　優貴菜さんいませんか？」
「なにぃ、誰か呼んだーーーー？」
「優貴菜さんがここにいるって聞いて、洗濯物干しは終わりましたか？」
屋上に着くと、優貴菜は屋上の縁にある手すりに体を乗っけて、

たそがれているようだった。普段ポニーテールにしている髪が風でたなびいている。髪をほどいているせいか、普段よりも大人っぽい印象を佑介は受けた。

「君さ、鷲木先生に言われた？」

「何の話ですか？　もしかして莉子ちゃんの事ですか？」

「そう、その莉子ちゃんの事。私も今日の朝聞かされてさ、正直一番つけちゃダメな名前つけちゃったなって……」

「思い出すってことですか？　本当に思い出すことがあの子を殺してしまうんですか？」

「……、わからないけど。あの子の手のひら気づいた？　凄い荒れてるの。アレはいつも料理を自分で作ってるっていう手だよ。私も親父や母さんが料理人だからわかるけど、あの子はちっさい頃からそれ
をしてきた。その意味ってわかる？」　優貴菜は佑介に向き直る。

「僕も気づきました。もしかして、両親はあの子の面倒を、見ていないってことですか？」

「もしくわ、母親は死んでいて父親と暮らしか。どっちにしても、人の親を疑うのは嫌だけど、いい親に当たらなかったら、あの子は相当つらい思いをしてきてる」

優貴菜はもう一度、病院の外を眺めた。

「あの子は思い出さない方がいいんだよ。だからそんな子に思い出せっていう名前付けちゃったことが、自分に対して許せなくてさ」

佑介は、目を閉じて考えた。そして、そんな事はないと思い至った。

「気にしなくていいと思います、僕はその名前気に入ったし、莉子ちゃんも気に入ってました。だから、優貴菜さんも気にしなくていいと思います」
「そうかな、うーん。こんなにもやもやしてるのは性に合わないね。よし、気合いれよっ！」

そう言って、優貴菜はぱちぱちと顔を叩いた。

「あの、それで、病院の庭にでる許可をもらいたいんですけど、ダメですか？」
「いいよ、外であの子の事楽しませてやってよ！　君のこと気に入ってるみたいだし、あの子のためになるなら、私は許可をだすよ？」
「ありがとうございます、じゃあ、行ってきますね」　そう言って、佑介は屋上を後にした。

残された優貴菜は、解かれたポニーテールを結びなおして、
「あんな若い子に、負けてられないわ」　と、決意を新たにした。

「許可もらえたよ、病院内の庭だけどいいかな？」
「はい、お庭行きたいです！　行きましょっ」　莉子に促されるままに、佑介達は庭に出た。

庭に出ると、ひまわりだけがたくさん植えられた花壇を見つけた。
「私って、こういうお花とか好きだったんでしょうか……」　高く伸びたひまわりを見て、莉子は呟いた。

「今の莉子は、この花を見てどう思うの？　今の自分の好きな事を、大切にしてもいいんじゃないかな？」　今の自分と失った記憶の自分。どっちも莉子なんじゃないかと、佑介は思った。

「今の私ですか、今の私は好きだと思います。でも、何だかこの花達を見てると心が揺れます」

「あんまり深く考えないようにね、考えすぎてもよくならないと思うからさ」　佑介は記憶の事を思い出して、思わずフォローした。

「でも、たまに来たいって思います。私、ひまわりが好きみたいです！」

佑介は莉子の見つめるひまわりを、同じようにじっくりと見つめてみた。

「そうだね、俺もひまわりが好きだ」

「はい。……私もひまわりみたいになれたら……」

莉子は、佑介に聞こえないほど小さい声で言った。

二人は一緒にひまわりを眺めながら、夏の陽気に照らされた。

二人の後ろには、たくさんのひまわりの影と、仲良く座る二人の影ができていた。

第二章「ハイド・アンド・シーク」前編

第二章　ハイド・アンド・シーク

1

「んっ……、朝か……」

佑介はベッドから降りて、カーテンを開ける。暑く強い光が差し込み、思わず目を閉じてしまう。

壁に画鋲で留められたカレンダーを見ると、今日は七月二十四日。もう夏休み初日からはや四日目になって、佑介はいつの間にか過ぎていく夏休みに、少々の寂しさを感じた。

（でもまあ、色々と楽しかったような気もするんだよな、莉子とも知り合えた訳だし）

佑介は七雲総合病院を退院し、いつも通りの自宅での暮らしに戻っていた。

「飯作るか、食パンまだあったっけ」　佑介は冷蔵庫の中を確認すると、最近買い物に行っていなかったせいで、中身はガラ空きだった。冷凍庫を開けると、冷凍されているパンが三枚だけ確認された。佑介はそこから二枚だけ取り出して、トースターにセットした。更に冷蔵庫から卵を一つ取り出した。

フライパンに油を敷いた後火を掛けて、フライパンが温まった所で佑介は手馴れた手つきで卵を落とした。

（病院の方が、いいご飯食わせてくれてたな……）　と目の前で目玉の形に焼けていく、卵を見て思った。

自分が作り出した、出来合いの朝食に少し嫌気が差しながらも、佑介はトーストと目玉焼きを皿の上に盛り付けた。冷蔵庫から牛乳を取り出して、コップに注ぐ。一通り作ったものを、テレビのある自分の部屋に持って行き、机の上にきれいに並べると、佑介はようやく食事を開始した。

「いただきます」

目玉焼きに醤油を垂らして、箸で小さく切り分ける。佑介はいつもと同じ朝食ながらも、淡々と食事を進めていった。

『今年の乙辺（おとべ）の夏は、昨年までの夏を上回る暑さになると思われます。日射病、熱射病で病院に運ばれた方が、今日までで十数名を超えていることから、これから外で長時間陽に当たるという方は、汗を掻いたときの水分補給や、直接陽を浴びすぎない様にするなど、熱射病対策をお願いいたします……』

「いつの間にそんな暑さになってたんだよ、この島は……」

自分が病院で寝ている間に、島が本格的に暑くなってきているという事実が、佑介のモチベーションをガクッと下げた。何故なら佑介は、この島に来てまだ二年目。この暑すぎる夏もまだ二回目で、暑さに対する耐性は少しもできていなかった。

窓の外を見ると、それはそれは暑そうな熱気が渦巻いている。急に佑介の喉がごくりと鳴る。

「なんか急に、暑くなってきたな」

ニュースを聞いてしまったせいか、佑介は体感温度が二度ほど上がったような気がした。

「莉子、元気にしてるかな」

佑介は、病院にいる莉子がこの暑さに耐えれるのか、心配になっていた。体格は見るからに華奢だったし、熱を長時間浴びているだけで、溶けてしまう様に思えるほど白い肌だった。

莉子の事を思い出していると、佑介は少しの間箸を動かさないで固まってしまった。

「バイト終わったらお見舞い行かないとな、、、、バイト、バイト、バイトッ！　ちょっと今何時だ？」　佑介は慌てて壁掛けの時計を見ると、そこには家を出なくてはいけない時間の十分前、九時二〇分を指していた。身支度を何もしていない今の状況と組み合わせると、相当にまずい状態だという事だ。

そういえば、ベッドの上で横になっている目覚まし時計は永眠してるんだっけと、何故この様な事態になってしまったのか、佑介は理解した。そして、二度同じ事をしてしまう、自分の成長のなさに、がっかりしてしまう。

（まだあれから店長に会ってないのに、これじゃあ即クビだよ……）

佑介は急いで汗を吸った衣服を脱ぎ去り、干してそのまま部屋に

入れただけのシャツに袖を通し、脱ぎ捨てられたジーンズを履いた。
「ああ、もう時間だ、片付けは帰ってきてからだな」
机の上に並んだ汚れた食器類を流しに置いて、部屋のカギをポケットに入れる。部屋のテレビを消し、戸締りを確認すると佑介は急いでアルバイト先に向かった。

2

タイムカードをギリギリのタイミングでレコーダーに差し込んで、佑介は安堵のため息を吐いた。傍でそれを見守っている彩島は、やれやれという表情をしている。
「二海君って、朝弱いのかな。朝慌ててバイト来ると危ないから、もうやめた方がいいよ」
彩島は佑介の怪我の事を心配しているのか、不安そうな顔で佑介に言った。
「今、目覚まし時計、壊れて、るん、ですよ。だか、ら、新しいやつ買うんで、大丈夫ですよ？」
佑介は息を切らしているので、声がきれぎれになっていた。彩島は心配性なのか、あまり佑介の言葉を信用していなかった。。
「家って七雲だよね。私が起こしに行っても」「おいっ彩島、二海、朝礼の時間はとっくにきてるんだぞ、早くホールに集まれっ！」
休憩室に、チーフでありマネージャーである、赤橋聡（あかばし・さとる）の大きな声が響き渡る。佑介と彩島はびくりと身体を震わせ、顔を見合わせる

と、急いでホールに駆けつけた。

「二海、今日はタイムカードをぎりぎりを通せたみたいだが、今度からは五分前には通せ。彩島も、人の事に構っていないで、自分の仕事に責任を持って果たせ。いいな？」

黒のウェイター服に身を包んだ赤橋は、鋭い目つきをしながら二人に注意した。背丈は一八〇センチを越える長身で、髪は短く纏まっているが、どこかラフさ髪型にが表れている。

『はいっ、すいませんでした…』　声がはもった二人は、同時に頭を下げた。

「二海、お前はブランクがある上に、経験もない。初心の初に戻った気持ちで、接客する事。彩島は二海のフォローばかりを考えないで、自分の仕事に集中する事」

赤橋は、厳しい口調で二人に言い聞かせた。

「あの、チーフ、店長は今どこにいますか？　気を遣ってもらったらしくて、お礼を言いたいんですけど……」　佑介は脅えながら、赤橋に質問した。

「店長はキッチンにいるぞ。邪魔はしない様にな」

「はい。すぐ戻りますんで、行ってきます！」　佑介は急いでキッチンに入り、店長に昨日までの事情を説明した。すると、店長は笑いながら佑介の肩を叩いて、しっかりと頑張れよ、と、佑介を励ました。

「じゃあ二海君。今日も頑張ろっか！」　白いシャツに黒のエプロンをした彩島はホールに戻ってきた佑介に、笑って活を入れた。佑介は全校生徒を虜にする笑顔に戸惑いながらも、「はい、お願いします！」　と、答えた。彩島はスタイルがいいからか、制服である白シャツの胸元が少しきつそうに見える。

佑介は更衣室に行って着替えると、ちょうど赤橋の『開店します！』という声が聞こえてきた。佑介はエプロンにボールペンを挿して、急いで自分の持ち場であるホールへと向かう。

こうして、佑介の二日目のバイトが始まった。

「いらっしゃいませっ！」　ドアが開く音に合わせて、佑介は最初の客に大声で挨拶をしたが、

「しっ……、大声を出すな。一番隅の席、俺の特等席だから、そこに注文取りに来てくれ、じゃ、あっ、後、俺が来たことは誰にも言うなよ……」

そう言ったのは、佑介の七雲高校での友人である加藤拓朗（かとう・たくろう）である。派手なアロハシャツとハーフパンツという、何とも夏らしい服を着た拓朗は、店内で一番目に触れられ難い席に、途中ラックに積んである週刊誌を持って向かった。

拓朗の身長は一七〇後半、髪は茶に染めて好き放題に伸ばしているが、ワックスで纏めている。見た目はかなり女の子にもてそうだが、学校中にそんな噂は一切なかった。

（あいつ、何やってるんだろ。言われなくても、注文位取りに行くっての……）

佑介は新しいお絞りを取って席に向かおうとすると、カウンターの中にいた彩島が来た。

「二海君、今お客様に『いらっしゃいませ』って言わなかった？お客様の姿が見えないんだけど、私の気のせいかな……」　彩島は

勘良く拓朗の来店に気づいたらしい。
「えっ、ああ。ちょっと発声練習しとかないといけないって思って、早くお客さん来ないかな～ってはは」
佑介は半笑いを浮かべながら、拓朗の言いつけ通りに隠ぺい工作を手伝った。
「久しぶりだと、そんな楽しそうに仕事ができるんだね。私なんか三年目だから、そんな風に思えないな」　彩島は笑って、佑介の言葉に答えた。
素直に答えてくれる彩島に罪悪感を感じつつも、佑介は愛想笑いをして何とか場をごまかした。

「ちょっと、奥の机拭いてきますね」　佑介はおしぼりをエプロンに押し込んで、拓朗の待つ席へと向かった。
「やっと来たか佑介。お前聞いたぞ、人命救助に一役買ったらしいじゃんか？」
どっしりと席に腰を下ろした拓朗は、口元をにやつかせている。佑介はその表情が癪に障ったので、手に持っていた熱々のおしぼりを拓朗に投げて渡した。

「あっち、お前やめろ、ばれるって。さっきの話の続きだけどな、お前が命がけで人を助けたって噂、結構町中に広まってるぞ、やったな！」
拓朗は声を出さないように口を閉じて、腹を抱えて笑っている。そんな噂が広まった所で、何もいい事がない事わかっているからだろう。

「何だ、今日はそういう嫌味を言いに来たのかよ。天気もいいんだから、外に出て陽に焼かれて来いよ。いい感じに丸焦げになって、海の人気者になれるぞ」

「これで俺の狙い通り、佑介君は普通の高校生活から外れたって訳か。おめでとう、今年の夏休みは退屈にはならないぜ？」
佑介は、（何が狙い通りだ……）と思いながら、席を離れて持ち場に戻ろうとした。

「おいっ、もう行くのかよ！　まだ話したい事があったのによー」
「俺は働いているんで、夏休みを満喫している高校生には付き合っていられないんだよ」

拓朗は不満そうな顔で、佑介を睨み付けた。

「じゃあ、バイト終わるまで待ってるからさ、終わったらこの机に来いよ！」
「何でだよ……」「二海君、お客様来たから注文取ってきてお願い！」

少し慌てた感じの彩島の声が二人の耳に届いた。
「真奈先輩が呼んでるぞ、頑張って来いよ～」　拓朗は雑誌に目線を戻してくつろいでいる。
カウンターから彩島の『いらっしゃいませ』という声が聞こえてきたので、佑介は急いで入り口に走っていった。

佑介は二人の男性客を席に案内すると、お冷とお絞りをお盆に載せて、机の上まで運んだ。
「メニューがお決まりましたら、ボタンでお呼びください」　そう言って佑介はカウンターに戻った。カウンターの裏で、彩島はモーニングの準備をしている。

「二海君、三日も離れてたけど大丈夫みたいだね。ちょっとカウンター裏でドキドキしちゃってたよ私」　彩島はモーニングにつける、ゆで卵の用意をしていた。

「なんとか覚えてました。でもやっぱりまだ緊張しますね……」
佑介は胸をなでおろす。
「じゃあその調子で、メニューもしっかり届けてね！」　彩島がウインクする。その瞬間佑介の顔が少し赤くなるが、客のコールが聞こえてきたので、佑介は急いで席に向かった。
「あのがむしゃらな感じ、懐かしいな～」　彩島は卵を茹でながら、昔を思い出した。

3

午後の5時になってようやく客の数も減り、佑介のバイト時間が終わった。佑介はキッチンの店長に挨拶すると、やっと休憩室に入った。
「二海、お疲れ。少しミスはあったが、今日の感じ忘れないようにしろよ」
赤橋は、休憩室の机でぐったりしている佑介の前にお冷を置いた。
「あ、すいませんありがとうございます……」　佑介はコップを手にとって、一気に飲み干した。赤橋はそれだけ言って、休憩室から出て行った。

「二海君、お疲れ様。今日はいっぱい走ったね、なかなかいい走りっぷりだったよ？」
赤橋と入れ替わりで彩島が入ってくる。先に上がっていたのか、

彩島は既に私服に着替えていた。今日は黒のポロシャツとジーンズという、少し楽な服装をしている。

「お疲れ様です、この後ってディナーの時間なんですよね」　佑介は椅子から立ち上がった。

「そうだよ。私達とは別の人たちが働いてるんだけど、ディナーはしっかりした洋食のお店になるから、ちょっとまだ二海君は働けないかな～」

「そうですよね、まだ二日目ですし」

「まあその内教えてもらえるよ、じゃあね先帰るね、お疲れ様～」

そう言って彩島は休憩室を後にした。佑介は誰もいなくなった休憩室で私服に着替えると、莉子のお見舞いに行くという予定を思い出した。

「七雲病院って何時までやってるんだろうか」　病院の面会時間について佑介は知らなかった。

（あれっ、でも何か忘れているような…）

佑介は、頭の中に何かが引っかかっている様な気がした。ロッカーから携帯電話を取り出すと、『メールが届いています』という意味の緑のランプが点灯していた。

携帯電話を開いてメールを確認すると、『加藤拓朗』という名前が表示されていた。

「あ、あいつまだ待ってるのかな……」

佑介はホールに戻って、拓朗がいるであろう席を見ると、未だにご丁寧に座って待っていた。よく見ると、机の上に雑誌が何冊も積まれている。それだけの雑誌の代わりに、教科書を読める才能があったらよかったのにと、佑介は思った。やれやれと思いながら、佑

介は机に向かう。
　しかし、佑介が机の前で立っていても、拓朗は気づかない位に読書に夢中だった。

「拓朗、まだ待ってたんだな。その忍耐力はどこから来るんだよ……」　佑介は溜息を吐く。
「やっと来たか、いや是非とも佑介と話しておきたくてな。それだけ今回の話には価値があるわけなんだよ。まあ座れって」　拓朗は佑介に座るよう勧めるが、佑介は座っている場合ではなかった。

「悪い。今から急いで行かないといけない所があってさ、またバイトが入ってない時とかにゆっくり話そうぜ。な？」　佑介は悪いと思いながらも、手を顔の前で合わせて、拓朗の誘いを断った。
「お前、今まで待ってた友人に、それはひどいだろ！　何だよその用事って、せめてそれだけでも聞かせてもらわないと、納得いかねーぞ！」　拓朗は雑誌を引きちぎらんばかりに、怒りを露にしている。

「えーっと、あの、なんだ。病院にな、ちょっと再検査があって、それで行かないと行けないんだよ」　佑介は口をもごもごとさせながら、嘘をついた。拓郎に知られたら、何か面倒な事があるんじゃないかと、疑ってかかったのだ。
「ゆうーすけよ、嘘はよろしくないね～。昨日姉貴から、お前の怪我は大した事がない上に、もう再検査をする必要がどこにもないって事を、聞いてるんだよーーーっ！」

　不敵な笑い顔で佑介を圧倒する拓朗は、机を左手で叩きつけ、右手で佑介の顔に向かって指を突きつけた。嘘を暴かれた佑介は、体

中に一瞬にうちに冷や汗を掻いた。
「今日の俺に抜かりはないぜ。なぜなら、お前の噂を聞いてから、その話を聞くのをずっと楽しみにしてたんだからなーーーっ！」
ハハハと高笑いする拓朗。何がこの男をここまでさせるのだろうと、佑介は心の底からおびえた。

「嘘をついたのは悪かった。本当は、お見舞いに行くんだよ。俺が助けた子のな」
佑介は観念して、正直な話をする事にした。
「やっぱり隠してやがったか。子って、まさか、オンナノコを助けたのか？　まさか……」
「そうだけど、何かおかしいかよ。だから悪いな、すぐにでも行かないといけないんだ」
「すぐにって、もしかして佑介。そのまま手ぶらで見舞いに行く気かよ」
拓朗は口をあんぐりと開けながら、佑介の全身を見回した。

「え、いや、何か持ってくつもりだったって。病院行くついでに買いに行くんだよ」
「ちょっと待て、それなら俺に任せろ。女の子の年齢別にどんな物が欲しいか、完璧に理解しているこの俺にな！」　拓朗はビシッと、親指を立ててアピールしている。

「それ、本当かよ！　マスターしてたらもっとモテてる様な気がするんだが……」
「シャラップ！　とにかくデータベースは完璧なんだよ。だから今から買いに行こう、そうしよう」　拓朗は一人でわいわい盛り上がっている。するとそこに、
「拓朗君、こんな所にいたんですか……」
いつの間にか、二人の机の前にはチーフの赤橋が、背中に赤黒い

炎を燃やして立っていた。

「ゲッ、赤橋。ちょっと騒ぎすぎたか……。佑介逃げるぞ！　捕まったら八つ裂きにされる」

「ちょっ、俺は無関係だーっ！」

佑介は拓朗に腕を引っ張られながら『喫茶加藤』を後にした。途中、フォークやナイフが頬を掠ったりしたが、二人は無事に脱出した。

「で、何でここなんだよ」

拓朗についていくと、伊野部（いのべ）駅近く、佑介も何度か行った事のある少し大きな本屋に着いていた。

「で、これがその物だ」　拓朗は店内に入ると一直線に目的地まで進んでいき、あるコーナーに平積みされた本を一冊手に取って、佑介の顔の前に突きつけた。

「これって、もしかして……少女マンガか？」

普通の漫画にはありえない、ピンクで縁取られた表紙。男が自分からは触りにくいオーラを纏った絵柄。それは少女マンガに他ならなかった。

「年頃の女の子は息を吸うように恋を求めている。しかし、その子は入院してしまって、それが叶わない。だからこそ、求めている内容が詰まった、『少女マンガ』こそ、今その子が最も求めているに違いない、救世主（メシア）だ！」

にわかに信じられないが、佑介は何となくその理論も間違ってはいない様な気がしてきていた。拓朗は佑介の信用しかけている表情に満足せず、間髪いれず追い討ちを掛ける。

「更に、今中学生のに大流行しているタイトルがこれ、『トライアングル』つまり、この本は全ての条件を凌駕しつくした、至高の一品にして、唯一無二の物だ！」
拓朗は少女マンガコーナーで大興奮しながら、大声で熱弁を揮っている。佑介は少しずつ、変質者（たくろう）から離れるように、後ずさりした。

「十巻まで出てるみたいだから、五巻まで買っとこうかな」
「おっ、太っ腹だね～。俺にもアドバイス代くれねーかな～」　拓朗は目を閉じて、催促するように右手の平を佑介の前で開いた。佑介はそれを見て、レジまで静かに歩いていった。
「おい佑介、どこ行くんだよ」　拓朗は佑介がいない事に気づいて、レジで袋を受け取る佑介に呼びかけた。それを聞いて佑介は振り向くと、

「ありがとう。じゃあまたなっ！」　手を挙げて、颯爽と佑介は走っていった。
「お前、覚えてろよ！　絶対感謝させて、恩を返させてやるからな！」
拓朗の声がむなしく、本屋の中で響き渡った。

七雲駅に戻ってきた佑介は、自転車に乗って急いで七雲総合病院まで向かった。昨日何となくの道で帰った佑介は、道を間違えつつも目的地に辿り着くことができた。
「はぁ、はぁ……何とか間に合ったみたいだな」
病院の玄関に書いてある閉館時間は、午後七時となっていた。
受付に行くと、何やら忙しそうにしている優貴菜が、廊下を歩い

ていた。
「優貴菜さん、あのっ今って莉子に面会できますか？」
「お、君か。悪いね、今それどころじゃないんだよ。熱中症やら日射病やらで、この病院にいっぱい患者さんが来てるからさ、悪いけど受け付けでちゃんと話してきて、ごめん！」
そう言って、優貴菜は駆けていった。よく見ると、受付前の椅子には体調が悪そうな人たちで、一杯になっていた。

佑介は受付で面会の許可をもらって、莉子の部屋に向かった。
莉子の病室の前に着いたのはいいが、佑介は一日会っていないからか、緊張して扉が開けれなかった。早く落ち着つかなければと、大きく深呼吸をする。

「えーっ、今日はプレゼントが……違うな。毎日暇だと思って、少女マンガを買ってきたんだけど……こ、これだ、よし」「あの、佑介さん。部屋の前で何をしてるんですか？」
「うおっ！」　佑介は後ろから掛けられた声に、背中を反らすほどに驚いた。
莉子はいつも通りのパジャマ姿だったが、病院内も少し暑いからか袖をまくっている。

「お見舞いに来てくれたんですね佑介さん！　さあ、部屋にどうぞ」
「そ、そう」　佑介は莉子に背中を押されるようにして、部屋の中に入った。

「今日は莉子が毎日暇だと思って、漫画を買ってきたんだけど」
佑介は本屋の紙袋から、一冊の漫画を取り出した。
「あ、これって、もしかして、少女マンガですか？　あんまり覚え

てないんですけど、呼んでみたいです！　佑介さんありがとうございます、大切にします」
　莉子はビニール袋に包まれたそれを手にとって、色々な角度から眺めている。

「今夜早速読ませてもらいますね？　何か凄くわくわくしてきました」　莉子は目を輝かせている。
「あんまり遅くまで読まないようにね？　規則正しい生活が第一だから」
「はい、じゃあほどほどに……」　莉子は本で顔を隠すようにした。隠しきれていない顔は、仄かに赤く染まっている。

「今日は遅くなってごめん。バイトの時間が五時まででさ、こんな時間になっちゃった」
「そうだったんですか？　お見舞いに来るの、無理してないですか？」
「大丈夫だって。莉子は今日どうだった？　やっぱりさびしかった？」
「えーっと、大丈夫でした。ずっと寂しがってはいられないです。後、検査はしたんですけど、記憶の方はまだ戻ってないです」　莉子は笑顔で答えた。佑介はその笑顔が、無理をしているんじゃないかと思った。それほどまでに、ぎこちない笑顔だった。

「ゆっくりでいいから、あんまり無理しないようにね」
「はい。ありがとうございます。そういえば、佑介さんお夕飯は食べたんですか？」
「あ、まだ食べてない。そっか、莉子もうすぐご飯の時間か。じゃあ帰ろうかな」
　佑介は時計を見ると、もうすぐ病院の夕食の時間だった。

「佑介さん、お仕事頑張ってくださいね？　お見舞いありがとうございます……」
莉子は寂しそうな笑みを浮かべて、佑介に言った。
「わかった。莉子も頑張って、じゃあ帰るわ！」　佑介は心配ながらも、病院を出ることにした。

病院を出ると、外は夏の暑さから少し解き放たれた、少し涼しい空気で満ちていた。
「冷蔵庫の中って何か入ってたっけ、身体だるいから買ってくか」
佑介は自転車に跨って、ふらふらとペダルを漕ぎ出した。帰り道の途中、コンビニでカップのラーメンを買って家に帰った。身体全体に広がる疲労感に満足しながら、お湯を温める。

しかし佑介は、家に着いて椅子に腰を落ち着かせるまで、『新しい目覚まし時計』を買わなければいけないという、目的を忘れているのだった。

「あっ、目覚まし時計買うの忘れた……」

佑介の間抜けな一言が、一人寂しい室内にじんわりと染み込んだ。

第二章「ハイド・アンド・シーク」後編

4

「ふぁぁあああぁぅぅ……」

六畳一間の部屋に、大きなあくびが犬の遠吠えの様にこだました。

（二度寝してしまった。何でこんなに眠いんだろ……）　佑介は重い目蓋をやっとの事で薄く開くと、いつも通りの少し汚れたアパートの天井が見えた。

少しむっとした暑さの空気を感じる。佑介は纏わりつく薄い毛布を、投げ捨てるようにして剥がした。暑さから、今は昼近くの時間になっているんじゃないかと判断する。時計を見ると、予想通り午前十一時を回っていた。

「今日はバイトないんだっけ」　カレンダーを見ると、今日の日付『七月二五日』にはアルバイトの時間が書いてない。という事は、今日は休みという事だ。

今日が休みだとわかった瞬間に、一日中何もやる事が無いと佑介は思った。

（こういう時には、拓朗から連絡があれば……）

布団を取り外して机として使っている『炬燵』の前に座り、何の気なしにテレビを付けた。

夏休みの特番らしき物が何やら騒がしいが、佑介はどうにも興味を持てなかった。

「学校もバイトもないと、こんなにもやることが無いのか、俺は……」

高校に入学する前に、佑介は実家を離れた。理由は何故だか知らされていないが、一人前になる為には必要だと佑介は思った。一人暮らしを始めてからは、色々な事が初めてだったが、なれない家事に悪戦苦闘しながらも、最低限の仕送りでやり繰りして生活していた。

しかし、今となっては一人暮らしに慣れてしまい、特に躍起になってやる事がなくなってしまったのだった。今の佑介にはバイトしかなかった。

少しの間悩んでいると、目覚まし時計を買わなければいけない事を思い出した。

「やる事は無いし買いに行くか」　何とか今日の予定を決めた佑介は、昨日一枚だけ残しておいたパンを焼いて、牛乳を飲んだ。

アパートから出たると、自転車に乗って駅前の電化製品屋に向かった。

「ありがとうございましたー！」

予め決めていた予算の範囲内目覚まし時計が買えた。袋をぶらぶらと右手にぶら下げ、佑介は店から出た。

（お見舞い、二日連続で行ったら、うっとおしいよな……）

買い物が終わっても、昼の十二時を回ったばかりだった。そして、佑介の頭の中にある一日のプランは、莉子のお見舞いに行くこと位しか浮かんでこなかった。

「昨日マンガ渡したばっかりだしな、さすがに今日は放っといたほうが――」
すると、ズボンの後ろポケットに入った携帯電話が、急に鳴り始めた。しかし、画面を見ても、番号しか出ていないので、誰が掛けてきているのかわからない。

（しょうがない……誰か分からないけど出よう）
「はい、二海の携帯ですが」
『あ、もしもし、二海佑介君の電話でいいのよね？　あのさ、今から病院来てくれない？　今すぐね！　じゃあ頼んだ！』「あ、ちょっと、もしもし」　ぷつッという音で、通話が切れた。

（この声、優貴菜さんだよな……）
勢いよく喋り続ける女性の声に圧倒された佑介だったが、何とか声の主を掴む事ができた。
「結局行くことになるんだな、俺は」　ためらっていった佑介は、気持ちを切り替えて病院に向けて自転車を走らせた。

（何であんなにも焦っていたんだろう、病院で何かあったんだろうか）
少し緊急の気配を感じた佑介は、ペダルを段々と強く踏み込んでいった。

「今日で何度目になるんだろうか」
毎日変わり映えの無い病院の玄関前に、佑介は立っていた。
夏休みに入って三度目となる来訪に少しうんざりしたが、緊急事態だという事を思い直し、足早に病院の中に駆け込んだ。

玄関を通ると、昨日と同じ様に病院内は大勢の患者で溢れていた。それぞれがロビーで受け付けを待ちながら、体を椅子にもたれかけさせていた。

どうしようかと考えていると、優貴菜が走り歩きでやってきた。

「拓朗から電話番号聞いて掛けてみたんだけど、よく来てくれたわ。君を呼ぶほどの事は無かったのかも知れないけど、ちょっと急な事態でね」「何があったんですか？」

「昨日の事だけど、あの後莉子には会ったのよね？」　優貴菜は血相を変えて佑介に尋ねた。

「は、はい、会いましたけど。莉子がどうかしたんですか？」

「昨日の君の面会が関係あるのか分からないんだけど、今朝からあの子の姿が無いのよ」

「部屋にいないんですか？　病院何には」　佑介は慌てた。

「さっきまで探していたんだけどいないのよ。会ったときに変わった様子は無かった？」

優貴菜は少しよれた紙を右手に持っていた。

「変わった様子は無かったんですけど……優貴菜さんその紙はなんですか？」

「ああこれ？　そう、これが部屋においてあった手紙なんだけど、ちょっと見てよ」

佑介は紙を受け取ると、そこには可愛らしい小さな字で、

『探さないでください。すぐに戻りますから』　と書いてあった。

「これって、戻ってくるっていう意味なんでしょうか。探さないでっていう意味がよくわからないですね」　佑介は書かれている事が理解できなかった。

「そう、どういう意味かわからないのよ。もしかしたら記憶が戻っ

て……」
優貴菜はとても動揺した表情で、佑介に話した。いつもの様な、あっけらかんとした雰囲気は無い。佑介は、優貴菜が莉子の事をとても思っていることを、改めて感じた。

記憶は戻っているのか分からないけれど、早く見つけないといけない。
「大丈夫ですよ、とりあえず莉子を探しましょう。鷲木先生は手が空いてるんですか？」
「先生はもう探してるわよ。何かよくわからない事をぶつぶつ言ってるから、相当焦ってるんじゃないかしら。でも体力が無いから、先生はあんまり役に立たないかも……」

そうこう言っていると、廊下の向こう側から息を切らした鷲木が、よたよたと歩いてきた。
「貴方は、二海君ですか……よく、ここに、来てくれました、是非とも、私達に、協力を……」
そう言って鷲木は、廊下に備え付けられた二人がけのソファーに、ダイブする様に倒れた。クーラーが少し弱めに設定されている病院内は、外の空気より少し涼しいだけだ。だから、この病院内をマラソンする様な事があったら、相当な体力と水分を消耗するだろう。

「先生、体力無いんですからあんまり走らない方がいいですよ。あんまり無理しないで」
優貴菜は寝ながら肩で息をする鷲木を心配した。
「っ、やっぱり、椅子にずっと座っているだけじゃダメですね……少しは鍛えないと」
「まだ見つかっていないんですよね、今探している人って誰がいる

んですか？」
佑介はとりあえず現状を確認しようとした。
しかし、優貴菜は言い辛そうに、視線を泳がせている。
「えっと、私と、先生と……君よ」　優貴菜は申し訳なさそうな顔で佑介を指差した。
「もしかして、莉子は病院側に大事な存在として見られていないんですか？」
患者が一人いなくなった事態に対して、捜索しているのが二人というのは少しおかしいのではないだろうか、と佑介は思った。
「それは理由の一つなんだけど、今私達は病院側に負い目があるの……」

佑介はどういう意味かわからなかった。

「二海君、貴方の判断は正しいですよ。彼女の存在はこの病院の現状において、仕事の邪魔者、場所取りでしかないんです。症状は記憶喪失というだけですからね……私達だけが味方なんですよ」
鷲木は平坦な声でそう言った。その言葉の中には病院に対する皮肉が感じられる。
「あの子の治療費や食費は、今病院側が仮に負担しているの。あの子は少しのお金しか持っていなかったし、素性がわからないせいで親にも請求できない。だからあの子は病院にとって厄介者になっているの」　優貴菜は更に続けた。
「だから、あの子に病室を抜け出されたという事がばれるのは、少しまずいのよ……」
優貴菜の声のトーンが、いつもより大分低い様に感じた。

「そうなんですか……じゃあ僕たちだけで探しましょう。二人より、三人のほうが効率的な筈です」　どんよりとした雰囲気を打開すべく、佑介は提案した。

「そうね。とりあえず出入り口だけは警備員さんに見てもらってるから、もう一度病院内を探しましょう。先生は少し休んでてください」

「いえ、私も行きます。私の探しものを見つける為の十カ条を使えば、次こそは……」

そう言って鷲木はソファーから身体を離し、足を引きずったフォームで歩いていった。

「大丈夫ですか、鷲木先生は……」

「まあ、二人でやるより建設的よ。ここは三手に分かれて探すわよ、君は患者さんの部屋とか開けれないだろうから、それ以外の場所を探してみて！　あ、これ渡しとくわ」

優貴菜は、ナース服のポケットから、首掛けの名札のようなものを取り出した。

「病院観覧の許可証よ。君が誰かに素性を聞かれたら、これを見せれば怪しまれないから」

そう言って、佑介の首に許可証を下げた。佑介は至近距離まで来た優貴菜に、少し動揺した。

「わ、わかりました。じゃあ屋上辺りから探してきます！」　佑介は廊下を走っていった。

「廊下はあんまり走らないようにね！　見つけたら携帯に連絡するのよ！」　優貴菜は叫んだ。

「わかりました！　見つけたら連絡します！」　佑介は顔だけ振り向きながら答えた。

「ったく、幼いんだから……」　優貴菜は走っていく佑介を見て微笑むと、気合を入れ直すために、両頬を軽く叩いた。
「さっ、家出少女を探しますか！」
優貴菜は何か策が有るのか、目的地に悠然と歩いていった。

5

鷲木には莉子を見つける事ができるという勝算があった。
「まずはそうですね、少し落ち着いてリフレッシュしますか……」
自分の部屋に入り、湯沸かし器に水を入れてタイマーをセットした。
「私としたことが、こんなにも動揺したのは久しぶりですね。全く、どこに行ったんでしょうね……」　湯沸かし器のタイマーが鳴り、コップに入れたお湯にインスタントコーヒーの粉を入れる。その後、そのコーヒーの中にスティックシュガーを三本分ぶち込んだ。
（ふぅっ、やっと一息つける）
入念に掻き混ぜて、ずずっと砂糖が大量に入ったコーヒーを啜った。
「頭を使う時は、やっぱりこれじゃないと」　鷲木は回転椅子に座りながら、足を組んでコーヒーに舌鼓を打っている。
鷲木は、今朝莉子がいないと優貴菜に報告されてから、暴走機関車のように病院内を走り回っていた。しかも、ブツブツと物を言いながら走っていた為、相当に看護婦に気味悪がられた。

「私は何で、あんなにも体力任せに探してしまったんでしょうかねぇ」
自分が何故そんな馬鹿な事をしてしまったのかと、鷲木は悩んだ。が、考えても答えは見つからないでいた。というか、その時の記憶が頭の中に残っていなかった。

「さてと、あんまり楽観はできないですから、彼女を探すとしましょうか」
回転椅子から重い腰を上げ、早速捜索に出た。
「まずは最後に彼女を見た場所を探すとしましょう」
鷲木は自分の中での『探し物の法則第一条、最後に見た場所を探せ』に従って、脳外科の診察室を探すことにした。診察室に入ると、そこには誰もいなかった。

「今、ちょうど患者がいなくてよかった。誰か来たら私が診なくてはいけませんからね」
しかし、ベッドの下や机の下などを探したが莉子はいなかった。
「まあ流石に、すぐには見つかりませんか。次は彼女の病室に行ってみますか」
同じ階にある莉子の病室まで、鷲木はゆっくりと歩き出した。

佑介は一度行った事のある屋上に向かって走っていた。
(病院内にまだ残っているとしたら、屋上だけは探しておかないとッ……)
一階から四階まで、一息で登っていく。太ももやふくらはぎに溜まっていく乳酸を気にしつつも、一回でも止まったらダメだと言い聞かせて、佑介は登りきった。

「まあ、そりゃ、いないよ、な……」
誰もいない屋上を見て安心したのか、佑介は息を切らせながら床に座り込んだ。
優貴菜が言った「記憶が戻った」という言葉が気になった佑介は、一番死にたいと思っている人が行きそうな場所である『屋上』に向かったのだった。

「ちょっと休まないと、無理だな……」　屋上に出た途端に、佑介を暑い日ざしが照りつけた。佑介はまばゆい日差しを手で遮りながら、入り口に少しだけある日陰の中に、逃げるように向かった。
「これは熱中症が流行る訳だよ……」　外気は昼の時間帯を過ぎて、一番の暑さになっていた。
佑介は今日まで病院にいたり、喫茶店でバイトをしていたりで、最高に暑くなっている乙部の空気を今日初めて吸ったのだった。

「これはもし莉子が外にいたら、確実にぶっ倒れるな……」
日陰で休んでいても汗が出てしまう状況だ。直接浴び続けたら、確実に危ないだろう。
「このままじゃ俺も患者に逆戻りするか」
そう言って佑介は屋上を後にした。

（やっぱり一回莉子の病室に行くべきだよな……）
佑介は階段を下りながら考えていた。自分が渡した漫画がそこにあるか無いかで、色々な事が推測できるのではないかと思いついたからだ。
そうして佑介は階段を下りて莉子の病室に向かった。

「で、何でみんな集まるわけよ」　優貴菜は肩を落とす。
「まあ、皆さん考えることは一緒という事で……」　佑介は苦笑いした。
「私は理論に則って、ここに来ただけですが」　鷲木は心外なという顔をした。

三人は莉子の病室の前で、打ち合わせたかのようにばったりと出くわした。

「とりあえず入りませんか？　三人で探せば一部屋位すぐですよ」
佑介は先陣を切って扉を開けた。しかし、人がいる様な気配は無かった。
「やっぱりここにはいないみたいね」
「いや、理論的にはベッドの下も探さなければ。話はそれからです」
鷲木は床に這い蹲ってベッドの下を覗きこんでいる。しかし、すぐに誰もいないことがわかったようだ。

鷲木と優貴菜が落胆している横で、佑介はある事気がついた。
「あれっ、昨日俺が渡した漫画がない」
さっきまで落胆していた優貴菜が、その言葉にピクリと反応した。

「それってどんな内容？　あの子が記憶を戻すような漫画を渡したんじゃないでしょうね？」
優貴菜が佑介に詰めよる。
「いえあの、拓朗に勧められた本で、内容は知らないんですけど、その漫画が原因なんでしょうか」
「拓朗ねぇ、あいつ本当にろくな事しないわね。病院から出て聞いてこようかしら」
優貴菜は顎に人差し指を当てて悩んでいる。

「五冊とも無いなんて、どうやって持ち運んでるんだろう」
「貴方の渡したその本は、五冊あったのですか？」
佑介が頷くと、鷲木はある事に気づいた。
「その漫画がここに無いという事は、それを持って移動しているという事です。つまり、余り動かずに、どこかに身を潜めていない限り、すぐにでも見つけられるでしょう」

「という事は、あまり動かないで、見つかりにくい場所に隠れている可能性が、高いっていう事ですね？」
佑介はなるほどというジェスチャーをした。

「じゃあ私はまた新たな理論を元に、探してきましょう」　鷲木は部屋を出ていった。
「私も、拓朗にちょっと漫画の内容を確認してくるわ、何か気になるのよね」

ごめんと言って、優貴菜も部屋を出た。莉子の病室に佑介が一人残された。

「こうして、一人になったと」
ベッドの上に腰を下ろして、佑介はこれからどうしようかと考え始めた。

「そういえば俺の部屋って、探したのかな」　佑介の呟きが部屋の中で寂しく響き渡る。というよりも、優貴菜と鷲木がどこを探したのかわからない佑介にとっては、全てが未知だった。
「一応行ってみるか……」

佑介は立ち上がって、病室を抜けた。少し歩いて、一昨日まで自分が寝ていた部屋に入った。

片付けが終わっているからか、何となく寂しそうな雰囲気を感じられる。

「まあ、こんな所にいたらすぐに見つかっているよな」

ベッドを見ていると、少し疲れが溜まった身体が、ベッドに飛び込みたいという欲求を刺激してきた。見るからにふんわりとしたその出で立ちは、全ての疲れを包み込んでくれると思える程だ。身体がうずうずとしてくる。

「誰もいないよね？」

扉をしっかりと閉め、周りを確認する。佑介は安全が確認されると、勢いよくベッドに飛び込んだ。しかし、そこで待っていたのは柔らかな抱擁ではなく、手荒い歓迎だった。

「いって――――、痛いって、何でこんな固いものが入ってるんだよっ！」　ベッドに仕込まれた硬い物に佑介は怒り狂い、勢いよく布団をめくり上げた。

「っきゃっ、あの、見ないでくださいっ！」

「えっ？」　掛け布団を持ったまま、佑介は固まった。

「こ、この本はその、あの、えーっっと……」

佑介の眼下には、漫画を隠すようにしている莉子の姿があった。ベッドの上には、机に置いてあった電気スタンドと、隣のベッドの掛け布団が莉子を囲うようにしいてある。

「えっと、莉子はこんな所で何をしてるの？」

「あ、佑介さん……」

ベッドの上に展開している色々な物の意味がわからず、佑介は聞

いた。
「えっと、隠れてました。布団の中で漫画読んでたんです」
佑介は、ベッドの上にあるもう一つの掛け布団が、莉子の身体の幅と同じ高さに折りたたんであることに気づいた。上から掛け布団をかけると、莉子が入っていても見た目は平らで、人が入っているとは思えないという事か。

「何で隠れて漫画を読む必要があったんだ？」
「あの、その……佑介さんはこの漫画の内容を見て買ってくれたんですか？」
莉子は恥ずかしそうに枕を抱えながら、佑介に質問した。

「えっ、じ、実は友達に勧められて買ったんだけど、何か変な内容だったとか？」
「やっぱり……、あの、一度内容を見てください」　そう言って莉子は、佑介に漫画を手渡した。

「ふむ、んっ？　はぁ……へっ？　こ、これは！」
予想していた内容の、遥か上を猛スピードで突っ走っていく『弾けっぷりに』佑介は思わず、漫画を床に叩きつけたくなる衝動に駆られた。
「それを見てるのを誰かに見られたくなくて、今まで隠れてたんです。皆さん心配してました？」　莉子は不安そうに言った。

「それはみんな心配してるよ。だけど、そんなに見られるのが恥ずかしかったんなら、読まなくてもよかったのに」　佑介は納得いかない様子で莉子を見た。

「だって……あの本は佑介さんがプレゼントしてくれた物だから」
莉子は顔を真っ赤にしている。それを見た佑介は釣られて恥ずかしくなった。

「そっか、それは買ってあげた甲斐があったよ。俺がしっかり内容選べばよかったんだね」
「いえ、えっと、これ結構面白いんです……もう四冊読んじゃって最後の一冊読んでたとこで、だから、佑介さんは間違ってないです」
莉子は佑介を庇った。
「本当に？　じゃあ俺も貸してもらおうかな？」　はははは、と佑介が笑う。つられて莉子も同じように笑った。

と、次の瞬間笑い声の数が一人分増えていた。

「ふっふっふっ、二海君。君さ、見つけたら電話するように言っておいたわよね」
嘲るように笑いながら、優貴菜が部屋に入ってきた。
「えっと、その、一段落ついたら、連絡するつもりだったんですがっ」
「へぇ、拓朗に電話したら内容について吐いてくれたよ。今回の事はあんたら二人の責任って事でいいわね？」　優貴菜がニヤリと口を歪ませる。

「責任って、俺は莉子を探し当てたのに、あんまりですよ！」
「問答無用、君の持ってきた本で莉子は隠れて、そのせいで私の仕事が片付かなかったんだよ！だから溜まっている私の仕事を手伝いなさいっ！　文句は言わさないわよっ」

「そんな、莉子助けてくれ――――――っ」

そう言って優貴菜は、佑介の襟首を掴んで屋上まで引っ張っていった。

第三章「ボーイ・ミス・ガール」前編

第三章　ボーイ・ミス・ガール

1

次の日、朝から『喫茶加藤』で汗を流す佑介は、頭である事を考えながら浮かれていた。

「莉子、明日のバイトが終わった後に、夜ご飯でも食べに行かない？」

「外でですか？　えっと、私、外に行ってもいいんでしょうか……」

莉子がちらりと優貴菜を見る。優貴菜は知らない振りを決め込もうとしていたが、それでは莉子が納得しそうにないと思ったのか、佑介に助け舟を出した。

「いいわよ？　ずっと病院にいても気が滅入っちゃうとし、病院のご飯も飽きちゃったでしょ？」　優貴菜は笑いがら言った。実は佑介に仕事を手伝わせた後に、優貴菜が佑介に、『莉子とご飯食べにでも行ったら？』　と提案したのだった。

「それなら、連れてって下さい！」　莉子は顔を綻ばせた。

「服は来たときに背負ってたバッグに何着か入ってたから、それでいいわよね？」

すかさず言葉を添える優貴菜。どうやら計画は完璧の様だ。

「そういえば、莉子の私服姿って見たこと無いな」　佑介は頷いた。

「あ、私もどんな服着ていたのか覚えてないから、楽しみです！」

莉子は自分の私服姿を想像しているのか、目を瞑っている。

「じゃあ、明日の六時に病院まで来てね！　遅刻厳禁だからね？」
優貴菜は親指を立てて、佑介に合図した。佑介は少し脅えながらも、快く承諾した。
「楽しみにして待ってますね、佑介さん！」

という事があった。そのせいで、佑介の頭の中はその事で一杯になっていた。いつの間にかセッティングされた初めてのデートらしきものに、佑介は多少緊張していた。
どの様な服で行こうか、何を食べに行こうか等、色々な選択肢を作っては消し、増やしては減らし、それを繰り返して寝る前にやっと考えが浮かび、夜中の三時にようやく眠ることができた。

だからそのせいで佑介の仕事ぶりは、睡眠時間のせいもあり、時間とともに自然と集中力が落ちてしまっていた。

『喫茶加藤』は今日、久しぶりの大盛況の様相を見せ始めていた。

「アイスティ、お待たせいたしました」　佑介はカウンターからアイスティの載ったお盆を受け取って、このオーダーを受けた机に持っていく。

「えっ、注文が違うんだけど」　四人がけの席に座る二人の男の中で、気の強そうな一人の男が佑介に指摘した。
「え、アイスティではなかったでしょうか？」　佑介は慌てて伝票を確認した。そこにはアイスコーヒー一つと、アイスカフェオレ一つと書いてあった。

「それ別の机じゃないですか？」　強気な男は更に佑介に食って掛かる。

「すいません、今すぐ交換してきます」　佑介はアイスティ二つを盆に戻して、慌ててカウンターに戻っていった。

「二海君どうしたの？　もしかして私間違えてた？」　カウンターにいる彩島は少し不安そうな顔で、佑介を見た。

「いえ、僕のミスです。持っていく机を間違えてしまって、あの、アイスカフェオレとアイスコーヒーって彩島さんにオーダー伝えました？」　彩島は首を横に振る。どうやら佑介は二つ受け取った注文のうち、一つをオーダーし忘れていたようだった。

「急いで作るから、とりあえずこれを持っていって！」

「はい、行ってきます！」　佑介はお盆を持ち直して、正しい注文先に向かった。

その席では、退屈そうにアイスティを待っている二人の客が座っていた。

「大変お待たせしてしまって、申し訳ありません。アイスティです」

急いで机にアイスティを並べる。しかし客二人はまだ何か足りないぞという顔をした。と佑介は感じた。

「あの、サンドイッチ頼みましたよね？　もしかしてまだ作ってないんですか？」

「あ、サンドイッチ……申し訳ありません、すぐに作らさせて頂きますので、少々お待ちください！」　佑介は頭を何度も下げると、カウンターまで走って戻った。

「先輩、すいません、サンドイッチ急いで一つお願いします。さっきアイスティを頼んだお客様の注文を、サンドイッチだけ忘れてしまって……」

「わかった、ちょっとチーフ呼んでくるね！」　彩島が焦って休憩室に走っていく。
　そこに、さっきの文句を言った強気な客が現れた。
「おい、アイスコーヒーとカフェオレいつまで待たせるんだよ！もう注文いいからよ、店長呼んで来い、店長。お前じゃ話にならないんだよ」

　男は大声を上げて、佑介に詰め寄った。

「え、あの、はい……少々お待ち――――――」「本当に申し訳ありませんでしたっ！」
　佑介の鼻が佑介の膝に付く。頭を持たれた佑介は、物凄い力で折り曲げられた。

　その声は『喫茶加藤』のチーフである、赤橋から発せられていた。
「この度は、私どもの教育が行き届いていないせいで、お客様に大変なご迷惑をおかけいたしました。お代は結構ですので、どうか少々の時間だけでも頂けないでしょうか？　すぐにお持ちしますので、どうかよろしくお願いします」　そう言うと、赤橋は更に深く頭を下げた。

「あっ、いや。じゃあ、待ってますんで、お願いします」　強気な客は、赤橋の勢いに飲まれたのか、冷静な口調でそう言った。
「ありがとうございます。この様な事は二度とないようにしますので、どうかこれからも『喫茶加藤』をよろしくお願いします」

　客は振り向かなかったが、赤橋は更に頭を下げていた。佑介は泣きたい位の心境だったが、ここで泣いてはいけない様な気がして、必死で我慢した。

その後は、常に的確な行動で着実に仕事をこなしていく彩島と、長年の経験から来るすばやい足回りで次々と消化していく赤橋の二人で、すぐにホール運営は円滑になっていった。佑介は軽食のオーダーを店長に通すのと、出来上がった物を、客に持っていくことだけに専念していた。というか、それだけしかやるなと、赤橋に釘を刺されていた。

ホール三人体制になってから数時間が経ち、『喫茶加藤』はひと時の落ち着きを見せていた。

「何してるんだお前は、どうして昨日まで普通にやっていた事が、急にできなくなる！」

休憩室の中で赤橋は佑介に激昂した。

佑介は口を開こうにも、身体が震えて何も言えなかった。

「お前がミスすると言う事は、店がミスしたって事と一緒なんだよ。お前のミスが、店の評判に繋がる。それはお前の歳なら簡単にわかるよな？」　赤橋は更に続けた。

「アルバイトを雇ったのは、キッチンで俺が店長を手伝うためだった。だから、ホールスタッフを雇って、効率化を図ったんだ。しかし、お前がそれじゃあ意味が無い」

赤橋は一息ついて、改めて佑介を睨み付けた。

「次、こういう事があったら、その日限りここを辞めてもらうから、そのつもりで昼から働け」

そう言って赤橋は佑介の前から去ろうとした。

しかし佑介は、我慢していた言葉を、とうとう口にしてしまった。

「俺、まだ今日で三回目ですよ……こういう事が一回あったって、おかしくないですよ」
その言葉に、立ち去ろうとしていた赤橋の、歩みが止まった。
「おい、帰っていいぞ。そして二度と来なくていい、以上」
地の底から湧き出た様な、重たい声色で言葉を吐き出して、赤橋は休憩室を出た。
佑介は目尻に少し涙が浮かぶ程に、身体を震わせている。それほどまでに、恐怖していた。

佑介はゆっくりと制服を着替え、休憩室を出て行く。赤橋の怒鳴り声が気になってカウンターから休憩室に戻ってきた彩島は、佑介がスタッフ用出口に向かう少しの時間だけ、その後ろ姿を見ることができた。
彩島はすれ違った赤橋を追い駆けて、ホールに向かった。

「チーフ、今の言い方はきつすぎるんじゃないですか？」
「彩島、お前も口答えか。最近の若いやつは、上下関係ってやつをわかってないよな」
赤橋は皿を洗いながら、淡々と答えた。
「私だって、最初の頃はミスしました。その度に怒られましたけど、今日みたいな言い方ではなかったです」　彩島は、昔の自分を思い出していた。しかし、その頃の赤橋とは様子が違っていた。

「今日のアイツは朝から上の空で仕事をしていた。朝礼の時にしっかり言っておくべきだった、今回の事は俺の責任かも知れんな」
赤橋は自嘲気味に言った。しかし彩島はまだ続けた。
「もしかして、拓朗君と関係あるんじゃないですか？」　赤橋の手が、ほとんどわからない位一瞬だけ止まった。が、彩島はその赤橋の動揺に気づく事はなかった。

「どうしてそう思うんだ？」　赤橋は黙々と皿を洗い続けている。その手つきに淀みはない。
「いえ、言ってみただけです。憶測でモノを言って申し訳ありませんでした」
そう言って彩島はカウンターを抜けて、スタッフ用出口のほうに向かっていく。

「おい彩島、お前までどこへ行く。今から午後の準備があるだろ」
赤橋は彩島の突飛な行動に少し慌てた。
「今から、ちょっと二海君連れ戻してきます。なんかこれじゃあ私、納得いかないんですよね」
彩島は笑って赤橋に振り向いた。赤橋はその表情から、その行動が断固とした意志によって行われていると、一瞬で理解できた。そう思わせるほどの、清々しい笑顔だった。

「おい、お前がいなくなったらホールは誰がやるんだよっ！」　赤橋は吼えた。
「チーフ、お願いしますね。すぐに連れて帰ってきますからっ」
そう言って、彩島は店を飛び出した。
「ったく、何の罰だよこれは。この世はどうかしてる……」
赤橋は、彩島達が戻ってくるまでの時間、地獄を見ることになると悟ったのだった。

2

伊野部駅のホーム、七雲方面行きの乗り場で、佑介は茫然と立ち

尽くしていた。

何かを考えようとしても、思うように考えが纏まらない。ただ佑介の頭の中には、赤橋の声と重なって、自分の父親の声が響き渡っていた。

『お前は何故、何をやらせても三流なんだ』　それは佑介が小学生の頃、絵を無理やり習わされていた時に、父親に言われた言葉だった。その言葉が、赤橋の教育とリンクして、佑介を支配していた。

『俺は、晶子ほど完璧にはなりません』　その頃、父親に対して言った言葉だった。

佑介と佑介の妹『晶子』は対照的な二人で、三つの歳が離れた二人は、裕福な家庭で育てられた。

晶子は、佑介と同じ事を習うと、何でも佑介を超えるほどまでに成長した。毎回晶子が佑介を超えるたびに、両親の佑介への関心薄らいでいき、いつの間にか佑介は何も期待されなくなっていった。叱られる事も少なくなった。

（俺はやっぱり、何もできないのかな…）

『兄さんは、私よりすごいよ。晶子は、兄さんの優しいところ、大好きだよ？』

晶子は佑介が父親に叱られるたび、そう言って佑介を励ました。しかし、その頃の佑介の心には、晶子の事を羨ましがる劣等感に満たされていた。何も持っていない自分が、許せないでいた。

目の前に電車が止まり、佑介はふらふらと乗り込み、座席にどかっと座った。

（これからどうしよう。また新しいアルバイト探さないと、何もやる事がないな）
考えが纏まらなかった佑介だったが、座席に座ってリラックスしたのか、少し余裕ができた。
夏休みは、ずっとアルバイトをして過ごそうと決めていた佑介は、急にこれからの予定が無くなってしまった事に、少し動揺した。

（まあ、どうにかなるかな……）

そう思って佑介は意識を眠らせた。そんなに悩んでも仕方ない、『喫茶加藤』を辞めさせられたことに変わりはないんだから。と心の中で呟いた。

しかしその次の瞬間、佑介に向かって、大きな声が浴びせられた

「何で逃げたの？　二海君何で逃げたのよ」

「えっ？」　佑介は戸惑いの声を挙げた。
一車両分に聞こえるかも知れない声で、彩島は佑介に向かって言った。上を向くとバイトの姿のままの彩島がいて、一体何が起きているのかわからなかった。何でここに彩島がいるのか、何でそんな事を言われているのか、わからなかった。

彩島の叫ぶ姿が、いつもの雰囲気から全く予想できくて、佑介は声が出ない。
「二海君、もしかして、もう『喫茶加藤』には来ないつもりじゃないよね？」
座ったまま見上げる佑介は、彩島から真っ直ぐに向けられる視線

に耐えられずに、目を逸らしてしまう。さっきの光景が頭を過ぎりながらも、悔しさを噛殺した声で佑介は言った。

「聞こえていたかもしれないけど、今日を持って俺は首にされちゃったんですよ」

全く笑える気分じゃなかったが、佑介は何故か笑ってしまっていた。

その表情に、彩島は目を細めた。

「二海君さ、何でアルバイトを始めようと思ったの？　私知りたい」

そう言って彩島は佑介の右隣の座席に腰を下ろした。二人は十センチ位の間を空けて、隣同士に並ぶ。佑介は何で言わないといけないんだと思いながらも、口が勝手に動き出した。

「拓朗。加藤拓朗って知ってますよね。アイツに誘われたんですよ、うちで働いてみないかって。だからです、自分からどうとか、そういうのはありません」

佑介は平然を装って、淡々とした声で言った。

「それは嘘だよ。だって二海君が部屋を出て行くときの背中、震えてた。それって、辞めさせられるのが、悔しかったからじゃないの？」

「そうですね。確かに物凄く悔しかったです……でもしょうがないのかなって、自分でしたミスですから」

彩島は、少し考えた後、穏やかな声で言った。

「私何となくわかるんだけどさ、きっと二海君は賭けの対象になってる。拓朗君の事情って知ってる？」　彩島はまじめな表情をしている。佑介は賭けという言葉が引っかかった。

「どういう意味ですか？」

「拓朗君はさ、店長に店を継ぐようにずっと言われてきたの。予定

では今年の夏休みから働く事になってたんだけど、代わりに二海君が来た。それは知ってた？」

「……」　佑介は黙っている。拓朗はそんな事を言ってなかったと、佑介は思った。

「チーフって店長にべったりで、だから多分、二海君がやめたら拓朗君は店を継がないといけないんだと思う。チーフは多分、そういう交換条件を拓朗君に出したんだよ」

「それって、え、もしかして俺があれだけ怒られたのは、その理由も入っているんですか……」

思わず佑介は拳を振るわせた。

「全部じゃないけど、そういう計算もしてると思う。だから私、二海君に辞めて欲しくない。あの人の思い通りに、二人をさせたくないんだよ……」

悔しいという感情が佑介を支配した。それと同時に、頭の中で父親と赤橋が重なっていく。

「だから、チーフから逃げちゃダメだよ。拓朗君は二海君の事を信じてるんじゃないかな。君なら自分の事を救ってくれるって」

「――――勝手なやつですよね、勝手に変なことに巻き込みやがって。それにチーフも、俺を道具としか思って無かったって事ですか……」

さっきとは別の、笑いが佑介の中にこみ上げてきた。

「そうですね。言われっぱなしで逃げるのは、もうこりごりです」

佑介は立ち上がる。

「うん、その意気だよ。私もサポートするから、お昼からはノーミスでいこうね！」
一緒に立ち上がる彩島は、佑介の手を両手で握った。力が篭っているからか、思わず声を出してしまいそうなるほどに痛かった。
しかし満面の笑みを浮かべる彩島を見ていると、佑介は放してくださいとは言い出せなかった。それほどに心を掴んでいた。
「あっいけない。ここで下りないと！」　彩島は佑介の手を引っ張ったまま、電車を下りていく。「え、うあっ」
強く引っ張られたせいか、急に彩島の女の子らしい手の感触が、佑介の脳に刺激を送った。
反対側のホームに止まっている電車に向かって、二人は走り出す。手を繋いだまま。
「急がないと、私も大変なことになるから！　しっかりついてきてよ！」
佑介の目の前を走る彩島は、女の子とは思わせないような速いスピードで、ホームを駆けていく。佑介は必死に走らないと、手を離された瞬間に置いていかれると思った。
「二海君、遅いっ！」　彩島は笑いながら言った。
「いや、先輩が速すぎるんですって、本当に。それと、手を繋いでいるのが、恥ずかしいんですけど……」
「えっ？　何か言った？」
「――――――いえ、なんでもないです……」
佑介と彩島は、出発の汽笛が鳴る電車に、息を切らせながら入ることができた。
「よかったぁ、なんとか、間に合ったね」　彩島は手を握っている

ことに気づいていないのか、まだ佑介の手をしっかりと握っている。

「あ、あの、手、放してもらって、いいですか？」

「あぁっ、ご、ごめ――――――ん、いつから、私いつから握ってたの？」　彩島は本当に気づいていなかったらしく、手を放して物凄い勢いで赤くなると、手を上下にバタつかせた。

「いえっ、大丈夫です……」

手に残る彩島の感覚を感じた佑介は、校内一の美少女と手を繋いでしまったことを改めて認識した。

第三章「ボーイ・ミス・ガール」後編

3

『喫茶加藤』に着いた二人は、かなりの量のお客がいる事に気づいた。しかし店は、店長とチーフしかいないはずなのに、何とか回っている様子だった。

「おいっ！　とりあえず何でもいい、手伝えっ！」　入り口から入ってきた二人に対して、赤橋はお盆を持ちながら口ぱくで喋った。声には発していないのに、何故か二人にはわかった。

「じゃあ二海君、とりあえずホールは任せた！　私はカウンター入るから」

「はいっ、じゃあチーフから引き継いできます」　佑介は更衣室で急いで着替えると、赤橋が走っていった机に向かった。営業スマイルでコーヒーとサンドイッチを机に置く赤橋は、佑介が来たのを察知すると、一瞬だけ佑介を睨みつける。佑介は思わず身体がびくつくが、必死に抑えることに成功した。

「とりあえず、今は全部届け終わったから、新しい客が来たら、それから注文取りはお前の仕事だ」　振り向きざま、速い口調でさらりと赤橋は話した。

赤橋の鋭い目に睨みつけられながら、佑介は何とか聞き取りにくい声を聞き分けて、自分のこれからの仕事を理解した。

「わかりました。あ、新しいお客様が来たんで、行ってきます」

「ミス、最低二回に抑えろ。それができたら、後で話を聞いてやる」
佑介が走ろうとした瞬間、赤橋の小さな声が聞こえた。佑介は短く「はい」と答えると、改めて入り口に駆けていった。

赤橋がカウンターに戻ると、中では彩島がにこにことしている。赤橋は何事も無かったかのようにカウンターの裏にある、休憩室に向かった。
「チーフ、良かったんですか？　拓朗君に店を手伝わせる絶好のチャンスだったのに」

「お前っ……彩島。お前のそれは勘か？　それとも凄まじく練られた推理なのか？」
赤橋は足を止めた。
「やっぱりそうだったんですか。全く知らない子まで利用するなんて、やっぱりチーフは合理的ですね」　彩島は赤橋を皮肉るように言った。赤橋はため息を漏らしている。

「まあ長い目で見るのが面倒になってな、すぐに結果を出してやろうと思っただけだ。しかし、彩島、お前のせいでまた面倒な事になりそうだ」　赤橋あエプロンを外して首を鳴らしている。
「実際、拓朗君とは何て約束したんですか？」
「約束か。最初は遊び半分の約束だったんだがな。あいつがここに現れてから、少し考えが変わったんだよ」　赤橋は笑い声が混じったような声で話した。

「二海君がどうしたんですか？」
「あいつはな、無性にむかつくんだよ。見てるだけで、な」
「それは何ですか？　もしかして八つ当たりの一種ですか？」　彩

島は目を細めた。
「似てるんだよ、昔の俺に。劣等感を滲ませた雰囲気、会った瞬間に感じ取っちまったんだ。あいつは俺に似てるって」
彩島は珍しく長話をする赤橋に驚きながらも、黙って話を聞いた。
「でもな、決定的に違う所が一つだけある」
「違うところですか？」
「それは、何となく俺にはわかったんだが、あいつには守るものが無い。これが何を意味するかわかるか？」
赤橋は背中で語るのをやめ、彩島に向き直った。彩島は少し考えたが、
「――――、戦うことができないって、事ですよね」　彩島は小さな声で言った。
「そうだな。守るものが無い人間は戦わない。だから俺は、あいつから理不尽に奪ってみたくなったんだよ。それであいつの気が変わるのか、試したくなったんだ」
赤橋はそう言うと、休憩室に戻っていった。
「二海君には、大切なものがない。本当にそうなのかな……」　彩島が呟くと、佑介が伝票を持って現れた。佑介の表情には、なぜか笑みが浮かんでいた。
「オーダー読み上げます、コーヒーワン、アイスコーヒーワン、カツサンドワンです」
「了解しました。じゃあすぐに準備するから、コップに水汲んでダッシュだ！　佑介君！」
「はいっ、えっ？　今、何か違和感が……」　佑介のお冷を汲む手が、一瞬止まった。

「いいからいいから、早くしないと次のお客さんが来ちゃうよ？」
笑いながらせかす彩島。
「すいません、行ってきます！」　佑介はお冷を盆に載せると、走っていった。
「全く、お盆持ったまま走るなぁって、いつも言ってるんだけどなぁ」
彩島は、その後も張り切って働く佑介を見ながら、いつも通りの仕事をこなしていった。

「彩島から聞いたが、午後のミスは無かったようだな。とりあえず、明日から一週間は置いてやる。その代わりだ」　赤橋は息を吸い込む。
「一週間で三回。お前は週に六回出ているから、六日を三回のミスで抑えろ。それができたら、もう一度正式に、アルバイトとして雇ってやろう」

「あ、ありがとうございます……今日は本当に申し訳ありませんでした」　佑介は頭を下げる。
「もういい。彩島を呼んできてくれないか？　今日の罪状は、あいつの方が重からな」
赤橋は表情を変えずに言った。

「あの、彩島先輩は、俺のせいで店を出てしまったわけで」「いいから呼んで来い！　何度も言わせるな！」　赤橋はイラついた表情で、佑介を睨んだ。
「すいません、すぐに呼んで来ます……」
カウンターで食器洗いをしていると思われる、彩島を呼びに佑介

は走った。

「彩島先輩、俺のせいで申し訳ないです……チーフが先輩に話があるって」

「やっぱりね、じゃあ食器洗いの続きしてもらっていい？」　彩島は布巾で手を拭っている。

「はい。本当にすいません！」　佑介はまたも頭を下げた。

「そんな事しないでよ。私は自分の為にしただけだからさっ」　彩島はそう言い残して、休憩室に走っていった。

佑介はカウンターに一人取り残されて、彩島の言葉の意味を考えた。

皿を洗い終わり、佑介は休憩室の外で彩島の事を待っていた。

休憩室の扉が開き、中から彩島と赤橋が現れた。

「休憩室を使って悪かった。着替えだけでも持っていってもらえばよかったな」

赤橋は少しだけ申し訳なさそうな顔を見せたが、すぐに元の冷淡な表情に戻った。

「ごめんね、私のせいで待たせちゃって……」

彩島はぐったりした感じで、休憩室から出てきた

「ちょっと長いなって思ったんですけど、何を話し合っていたんですか？」

「うーん、さすがに勤務時間中に抜け出すのはまずかったみたいなの。だから、給料が少し減らされる事になっちゃった」　彩島の顔が若干青白いように見える。

「えっ、俺チーフに文句言ってきますよ！　先輩より俺の給料を下げてもらいます！」

「駄目だって、もう決定されたことなの。続けれることになったん

でしょ？　チャンスは潰しちゃ駄目だよ！」　彩島は口の前に、指で小さなバッテンを作った。
「そうですよね、さっきも怒られてしまいました……」　佑介はがっくりとした。
「まあ、夜ご飯代とか浮かせば大丈夫！　夜は食べなくても平気だし、ついでに痩せれるしね」
　ははは、と乾いた笑いをする彩島は、更衣室までよろよろと歩いていく。

「え、夜ご飯自分で買ってるんですか？」
「うん、私の家族みんな帰ってくるの遅くてさ、だからみんな夜は別々なんだ」
「そうなんですか」

　佑介は頭の中にある妙案が浮かんだ。しかし、それを言うか言わないべきか考えていた。

「じゃあ帰るね！　明日もよろしくね、あ、後遅刻しないように！」
「あのっ！」
　そう言って帰ろうとする彩島を、佑介は勇気を振り絞って引きとめようとした。

「なぁーによ、佑介君！」　彩島は髪をふわりとさせて、佑介に振り向いた。
「――――――へ、今、何て呼びました？」　思わず佑介はフリーズした。
「何て急に片言になるの？　今、佑介君って呼んじゃった。合ってるよね？」

「あ、ってますけど……えぇ？」

「冗談だよ、冗談。それで、私の事引き止めなかった？」

彩島は人差し指をちっちっちっと左右に振った。

「えーっと、よかったら、今から夜ご飯食べに行きませんか？　俺のせいでバイト代が減らされてしまった訳ですし、ファミリーレストラン位だったら、大丈夫ですよ？」

「――――それって、食事のお誘いだよね。いいの？　私なんかとご飯一緒に食べても、楽しくないと思うけど……」　彩島は顔を下に向けて、指を遊ばせている。

「ぜんっぜん、大丈夫ですよ！　俺に奢らせてください！」

「本当？　じゃあ、行く！　連れてって！　今すぐ着替えてくるから、ちょっと待って！」

そう言って、彩島は急いで更衣室に駆け込んだ。

（全校生徒の憧れの彩島先輩を、食事に誘ってしまった）

佑介は今さら震えてくる足腰を押さえて、休憩室にある椅子に座った。目の前にある壁掛けの鏡に、ちらりと自分の顔が写る。

（うわ、髪型がぐしゃぐしゃだ……）

鏡を見て、何とかいつも通りの髪型に戻す佑介。それで落ち着いたかと思うと、今度は服の臭いが気になりだし、休憩室に置いてあった消臭スプレーを、全体的に満遍なく振り撒いた。

（若干柑橘系の臭いがし過ぎてる気もするけど）

そう思いながらも、佑介は念のためと、靴を脱いで靴の中にまで消臭スプレーを吹き込んだ。

（これでよし！）

「ごめん、待った？」　佑介の予想よりも早く、彩島は更衣室から出てきた。
「はい、大丈夫です、よ、え」　床に座っていた佑介は、急に更衣室から出てきた彩島の方に向いた。すると、ふわりとした布から生えた、健康的な艶を持った彩島の生足と顔が、約二十センチの距離にまで近づいた。
「うわぁっ！　すいません、あの、こんなに早いと思わなくて、えーっと……」
佑介は慌てて立ち上がり、混乱した頭から、できる限りの言葉を引き出した。

「ごめん、驚かせちゃった？」
「それは大丈夫です！　えっと、先輩メイク早いんですね！」
佑介は、がむしゃらに話題を変えようとした。明らかに話の流れがおかしいが、今は関係ない。彩島の太ももに釘付けになったのを、佑介は悟られまいと必死だった。
「嬉しいな。メイクした様に見えるって事だよね？　これノーメイクなんだよ？」
「本当ですか？　いつも綺麗だと思ってたんですけど、って俺何言ってるんですかね……」
照れ隠しに頭をかく佑介。
「二海君ちょっと褒めすぎだよ！　褒めても、今日の奢りは無しにはならないからね？」
「わかってます。約束は守りますから、じゃあ行きましょう！」

佑介は先陣を切って、扉を開けた。
「出発出発！　さー、今日は何を食べさせてもらおうかな～」
アルバイト後の疲れを感じさせない二人は、意気揚々とファミレスに向かった。

その頃、七雲総合病院では、

「私、普段こんな服着てたんですか？」　優貴菜は莉子の旅行バッグに入った服を、ベッドの上に広げて見せていた。
「結構何て言うかな、あっさりしてるわね。全体的に」
バッグから出てきた服は、上下の下着が三着と、ショートスカートが一枚。ロングTシャツが二枚に、ショートパンツが二本。Tシャツが二枚という内訳だった。

「それにしても、凄い量ね。旅行にでも出かける途中だったのかしらね。そういえば、歯磨きセットとかも、入ってたし」　優貴菜は、女の子のバッグだからと言って、鷲木に見せていなかったが、実はとても大事なことなのかも知れないと思った。
「旅行ですか。私はどこに行こうとしてたんでしょう……」
莉子は思いを巡らしているかの様に、目を閉じた。記憶を思い出そうとしている莉子に気がついた優貴菜は、慌てて佑介との食事の話に戻そうとした。

「さ、そんな事より、どれを着ていくか決めましょう？　もう二海君もバイト終わった頃だろうし、早く決めないと、中途半端な格好になっちゃうわよ？」　莉子を脅すように言う優貴菜。
「あ、そうでした。私、可愛い服で佑介さんに会いたいです。優貴菜さん見てもらえますか？」
「もちろん。そのために、ここにいる訳だしね？　ささ、脱いだ脱いだ！　莉子のファッションショー始まるわよ？」　そう言って怪

しげな雰囲気で、莉子に近づく優貴菜。

「自分で、自分で脱げますから！　出て行っててください――――！」

顔を真っ赤にして喚く莉子。

「おっと、危ない危ない。危うく犯罪者になるところだったわ。じゃあまずは、これいってみようか！」

そう言って、優貴菜はショートパンツと、Tシャツを手渡した。

「はいっ！　今から着てみます！」

「じゃあ、終わったら呼んでね！」　そう言って優貴菜は部屋を出て行った。

「今日は、佑介さんと、デート、なんですよね」　莉子は枕元にある、佑介からもらった少女マンガを見た。『デート』についての知識も、その少女マンガから仕入れていた。

「――――、佑介さんと、デート……」

莉子は着る予定の服を胸に抱きしめて、この後の二人のデートに思いを馳せた。

4

『喫茶加藤』から伊野部駅までの自転車、伊野部駅から七雲駅までの電車、そして七雲駅から少し歩いたところにある、ファミリーレストラン「ブルースカイ」までの道のり、すべてにおいて、佑介の隣には、彩島がいた。

隣にいる彩島の事を意識しすぎてしまって、佑介は頭を真っ白にして歩いていた。

「おーい二海君、通り過ぎてるよ！」

「あれ、ぼうっとしてました……」　佑介は振り返る。

「二海君ひどいよ。まあ私といても眠くなっちゃうのは、わかるけどね」

彩島は店の扉の前で笑っていた。

「眠くなってません！　さ、入りましょう！」

慌てて駆け寄ると、彩島は先に店の中に入っていった。

「一名様ですか？」　汗々とウエイトレスが駆け寄ってきた。

「あ、今来た子とで、二名です」　佑介は遅れて店に入ってきたので、彩島は「行きましょ？」と言って、先頭に立って席に歩いていった。

「今日は俺のおごりなんで、何でも好きなものを頼んでください！」

「うーん。まあ私の方が先輩なんだけど、今日だけはお言葉に甘えとこうかな～」

そう言って、彩島はメニューをペラペラとめくりながら、うーんと唸っている。佑介は、いかに安く多く食べるかを考えながら、メニューを厳選していた。

「ハンバーグ、食べようかな――、パスタもいいかも。お、ステーキかぁ」

佑介は彩島が呟くメニューに合わせて、視線を動かしている。ハンバーグ七百円、パスタ五百円、ステーキ千円！　と、佑介は頭の中で自然と唱えてしまっていた。

「よし、じゃあナポリタンにしよっかな。いいよね？」
「わかりました、じゃあ呼びますね」

注文を終え、机を挟んだ二人の間には、重たい空気が充満していた。それもそのはず、二人はアルバイトが始まるまで会ったことすらなく、病院で会ったのを含めても、四回しか会っていない。

更に会話も一回につき数分しかしていない二人が、急に一緒にご飯をするというのだから、会話がポンポンと弾む訳が無かった。

「今日は、本当にありがとうございました、これからも働けて本当に良かったです」
「いいよいいよ。一人減ったらなんか寂しいし、二海君いた方が楽しいしね」
「そうですか？　そう言ってもらえると、嬉しいです」　佑介はお冷をぐいっと飲んだ。
「ナポリタンとペペロンチーノになります！」

「はい、ナポリタンは私です！」　彩島が嬉しそうに手を挙げる。
佑介は、彩島が勢いよく手を挙げるのをじっと見ていた。
「じゃあいただきまーす！」　彩島はフォークを持つと、上品な手つきで食事を始めた。

「彩島先輩、もしかしてお腹すいてました？」
彩島は口にパスタを含んだまま、左右に首を振っている。
「あの、口の物が無くなってからでいいんで、ジェスチャーはしなくていいですよ……」

「だって、私ががっついてるみたいな事言うんだもん。私は食べるのが好きなの」
彩島は口元を緩ませながら、パスタをフォークでくるくると巻き込んでいく。その光景は、いつも仕事中きびきびと動く彩島と違って、女の子の様な振る舞いだった。
「二海君、何かさっきから私が食べてるの、ずっと見てない？　気のせいかな……」
「えっ、見てないですよ……気のせいです、気のせい」　慌ててパスタに齧り付く佑介。
「そうだよね、ちょっと自信過剰だったかな……」

はは、と笑う彩島。言われたとおり、佑介は彩島が食べている所をじっと見てしまっていた。
その後、二人は黙々と目の前のパスタを平らげていった。
「おいしかったね、何か焦って食べちゃった」
「そうですね、なんだかんだ言って、俺もお腹空いてたみたいです」
二人は何も無くなった皿を眺めた。

そして会話が途切れ、またも二人の間に静寂が満ちた。
「二海君、何で私が君を追い駆けたのか、気になる？」
お冷を飲んでいた佑介は、コップを口につけたまま、顔を上下に動かした。
「俺の聞き間違えかも知れないんですけど、自分の為だって言いませんでしたか？」
「よく覚えてるね。確かにそう言ったかも」　彩島はくすっと笑った。

「俺を助けるのが自分の為って、どういう意味なんですか？」
「チーフにね、仕返ししてやりたかったの」　彩島は晴れ晴れとした笑顔で言った。

「仕返しですか？」
佑介は彩島の口から出てきた予想外の言葉に、少し驚いた。
「うん。計画通りに二海君を辞めさせようとしてるチーフの、邪魔をしたかったんだよ」
「邪魔ですか……」　またも予想外の言葉。彩島の事を優等生としか聞いていなかった佑介は、『仕返し』とか、『邪魔』という言葉が、彩島から出てくるのが信じられなかった。

「後は、二海君が出て行くところを見た時にね、昔の自分思い出しちゃってさ」
「え、どういう意味ですか？」
佑介は仕返しの理由を詳しく聞きたかったが、話の流れを汲んで、追求するのをやめた。

「私さ、今では勉強も運動もまずまず出来る様になったんだけどね。高校に入ったばかりの頃は、本当に何もとりえの無い女子高生だったんだ」
彩島はコップの水を見つめながら、話し始めた。
佑介の聞いた話では、学力も運動神経も、まずまずという言葉で括れるレベルではないのに、目の前の彩島は、本気で言っている様だった。

「高校で初めて通知表を見せた時にね、二海君がチーフに言われたみたいに、私もお父さんに物凄く怒られてさ。その時の私も同じように、部屋を出たんだ」
「そんなに怒られる成績って、どんな成績だったんですか」
「恥ずかしいから言えないけど、その時は私泣きながら家を出たん

だ。でもね、誰も私の事探しに追いかけてくれなかったの。そればかりか、遅く帰った私を、更に怒ったりしたんだよ？」
眉毛をハの字にして笑う彩島。

佑介はその話を聞いて、自分の父親を思い出していた。

「それで、私は逃げたんだ。家出をして、もうこんな家に戻ってやるかって。夏休みだったのもあってさ、荷物をまとめてどこかに行ってやろうって」
「彩島先輩が家出、ですか……」
「あ、信じられないって顔してる。今までの話はノンフィクションなんだからね？」
「いえ、信じられなくはないですけど」　佑介は慌てて首を振った。

「その時、初めて『喫茶加藤』に立ち寄ったの。落ち着く雰囲気で、すぐ気に入っちゃってさ、勢いで「私を雇ってください」って言ったんだよ」
佑介は彩島の語る話に夢中になって、言葉が何も出なくなっていた。
「その時は、拓朗君のお姉さんの『優貴菜さん』が働いててさ、「いいよ」って一言でＯＫしてくれたの」

「優貴菜さんなら言いそうですね……」
「ごめん。私話長くなっちゃったね、もう出ようか」　彩島は腕時計を見た。
「そうですね……もっと話し聞きたかったんですけど、店も混んできたし、出たほうがいいですよね」
そう言って、佑介は会計で二人分の料金を支払って、ブルースカイを後にした。

「ご馳走様！　二海様には頭が上がりませんね」
「やめてくださいよ！　今日のはお礼なんですから！」　佑介は掌を左右に振った。
少し暑さが弱まった乙部島の空気を、彩島は大きく吸い込んだ。

七雲駅に停めてある自転車を取りに、二人は歩き出した。
「先輩、話の続きしてくださいよ！」　佑介は話の続きが気になってしょうがなかった。
「えーっとどこまで話したっけ、あ、そうそう。それで私は『喫茶加藤』で働くようになったの。しかも、優貴菜さんの部屋に入れてもらって、加藤家で生活してたんだ」
「両親は心配しなかったんですか？」

「それはね、優貴菜さんに働きたいって言った時に、親に許可を取ることを条件にされたから、大丈夫だったんだ。でも、その時は凄い怒られたけどね」
「許可はもらえたんですね」
「うん。本当に必死に頼んだんだ。この店で働いてたら、私の何かが変わるんじゃないかって信じてたから」　彩島は空を見上げている。
「もしかして、それがきっかけで？」

「そうなの。夏休み中頑張って働いて、間違えながらも色々な事覚えて、そうしてる内に、アルバイトの仕事全部覚えててさ、頑張れば何でもできるんじゃないかって、思えるようになってたの」
「頑張れば、何でもできる、ですか……」

（俺は今まで、頑張ってなかった訳じゃない……）

佑介の頭の中に、今まで何をしても実らなかった、自分の姿が浮かんだ。
「そう。その後勉強も部活も必死にやって、気づいたら得意なことになってたんだ。だから二海君も、アルバイトの事、諦めないでね！」
「……、はい。もう一度バイトを頑張ってみます」

佑介は今までの報われなかった自分が、頑張っていなかったとは思いたくなかった。しかし、彩島の話は、佑介の境遇に似ていて、同じようにバイトを頑張ったら、何かが変わる様な気がしていた。
「じゃあ、ここでお別れね。明日も頑張っていこう！」
彩島は自転車のグリップを握って、自転車に跨った。その後、右腕を振り上げた。

「はい。明日もよろしくお願いします！」
そう言って佑介も右手を振り上げる。
「じゃあね」　彩島の姿が、ゆっくりと闇に吸い込まれていく。
「頑張れば何でも、できる、か……」

佑介は時間を確認しようと、鞄に入った携帯電話を取り出した。

『不在着信三十件』　という文字が、携帯の画面に映し出された。
（誰だよ、こんなにかけたや、つ……やっぱい――――！）
佑介の全身に、一瞬にして大量の冷や汗が湧き出した。
携帯電話の不在着信には、『加藤優貴菜』と表示されていた。時

計はすでに八時を回っていた。

（さすがに、優貴菜さんは働いてるよな）

佑介はリダイヤルのボタンを押そうとしたが、約束を忘れてしまった事の恐怖が勝って、指が止まってしまった。

直接会って謝らないと、と思っても、七雲総合病院はもう閉館している。

「明日のバイト後まで、待ってくれないよな……」

佑介は自分がしてしまった、今日最大のミスで頭を一杯にしながら、帰路に就いた。

「あの野郎、結局来なかったわね」

優貴菜は携帯電話を確認しながら、私服に着替え終わってベッドに座っている莉子に言った。

「来ますよ……佑介さんは、私と約束したんです」

「でもね、もう病院しまっちゃってるから、どうあがいても入って来れないわよ？」

莉子は両手の拳を震わせて、それでも姿勢を崩さなかった。

「絶対に来ます。私、信じてるんです」

「信じてるのはいいけど、早く寝なさいよ？　身体に気を遣うのが、あなたの仕事なんだからね？」

優貴菜は莉子の顔を見た。まっすぐと何かを見つめる莉子に、それ以上何も言えなかった。

「寝るときは、ちゃんとパジャマに着替えるのよ？　そのまま寝たら、服が皺になるんだからね！」

「はい。おやすみなさい」

優貴菜はやれやれという顔をして、病室を出て行った。

「私を、一人に、しないで下さい……佑介さん」
優貴菜が最後に言った服の皺を気にした莉子は、慌てて服を脱いで畳み、パジャマに着替えた。皺になった服を見られたくないと、莉子は思った。
「嫌だ、いや、頭が、痛い……」
莉子の悲痛な叫びが、小さく響いた。

5

何で、無視するの？　お父さん。
私、ここにいるよ？　なのに、何で私を見てくれないの？

目の前でテレビを見続ける大きな男は、私のお父さんだ。でも、私が何を言っても、こっちを見てくれない。私を見てくれない。
お母さんはご飯を作っている。キッチンに向かって、黙々と。包丁の音がトントンと、聞こえてくる。友達はみんなその音が好きらしいけど、私は好きじゃない。

ご飯よ、とお母さんが言った。私は急いで机に走る。椅子に座って、ご飯を食べる。
私の隣にお母さんが座って、左前にお父さんが座る。
お父さんはお母さんが喋っても、そっけない返事をして、まだテレビを見てる。
私がお母さんの顔を伺うと、お母さんはにこりと笑って、私を見た。

私はお父さんと呼ぶ。でも、お父さんはこっちを向かない。テレビが好きなお父さん。
それが、私の家族のご飯の時間。

その日はお母さんは仕事で、家には私とお父さんしかいなかった。
お父さんはいつもと同じように、テレビを見ている。たまに小さな笑い声が聞こえて、近くによっていくと、お父さんは笑いを止める。
お父さん何が面白いの？　と聞いても、お父さんは答えてくれない。
お昼になって、私はお腹が空いてきた。
お父さんもお腹が空いてきたのか、テレビを消して立ち上がった。
お母さんに朝言われた、冷蔵庫に入っているご飯を取り出して、電子レンジに入れる。
チン、といい音がして、温かくなった料理がいい匂いが部屋に広がった。
机の上に料理を置いて、椅子に座った。
お父さんは机に向かって歩いてくる。でも、その机を通り過ぎた。
ガチャンと、玄関の扉が閉まる音がした。
玄関を見に行くと、お父さんの靴がなくなっていた。
お父さんは、外に行ってしまった。

少しの時間、テレビを付けてお父さんを待った。テレビの音につられて、お父さんがやって来ないかと、少し思った。
でもお父さんは結局帰ってこなかった。
冷めてしまった料理を食べる。あんまり美味しくない。
その夜、やっと帰ってきたお母さんは、すぐに寝てしまった。
私は一人で、ご飯を作って食べた。最近よく、お母さんが料理を教えてくれる。
私はお母さんと、楽しく料理をする。この時間が一番楽しい。

その次の日も、お母さんは夜まで仕事で帰ってこなかった。
同じように一人でご飯を作って、一人で食べる。料理が上手くなっていくのがわかった。

次の日も、お母さんは夜まで仕事だった。

私は、お父さんに見えていない。
お母さんは私と一緒にいる時間が、段々減っていった。

お父さん、お母さん私を一人に、しないで……

第四章「ダウン・ライト・ライ」前編

第四章　ダウン・ライト・ライ

1

「「ありがとうございましたっ！」」　佑介と彩島の声がはもる。

七月二十六日、お昼時の『喫茶加藤』は、昨日の賑わいを忘れたかのように平常営業。いつも通りのまばらな客が、コーヒーを啜りながら、スポーツ新聞や、週刊誌を読み漁っている。

昨日、莉子との約束を忘れきった佑介は、ベッドに身体を横たえても全く眠気がやってこず、今朝も睡眠不足のまま、バイト先までふらふらと自転車を漕いだ。

ここまで聞くと、昨日と全く同じ展開だったが、今日の佑介は違っていた。

「二海君、今日はオーダーミス無かったね？　何か凄い集中してたよ」

「そうですか？　気持ちが入れ替わったからですかね。俺もアルバイトを頑張ったら、変われるような気がしてるんです。先輩のお陰ですね」

「私、昨日凄い喋っちゃったよね……私のお陰なんて言わないでよ。これから二海君が変わる事に私は関係ないと思うしさ」　彩島は食器洗いをしながら答えた。

「目指すは先輩ですよ！　俺、先輩のいる高みに近づいてみたいんです」

佑介は彩島が洗った食器を、隣で受け取って丹念に水分をふき取っている。佑介は、食器を見つめながら、そう言った。
「私の高みって、私なんかそんなにいい物じゃないって……今だって受験勉強が上手くいってないしさ……」　彩島は苦笑いしながら、円を描くように皿を洗っていく。
「そういえば、先輩今年受験ですよね。やっぱり国立の大学を目指してるんですか？」
「うーん、受験の話はちょっと今やめて――――、ここにいる時だけは忘れてたいの」
　彩島は首を左右にブンブンと振った。受験の話が相当したくないようだ。

「わかりました。じゃあまたここ以外の場所で会ったときに、お願いしますね？」
「二海君鬼だよ……、外では会わないようにしよ、絶対に逃げ切ってやる――――！」
　彩島はエプロンを捲り上げて、顔半分を隠すようにした。
「手始めに三年生の補講に忍び込んでいいですか？」　ニヤリと笑う佑介。

「おい、お前ら随分楽しそうだな。俺も混ぜろよ。なあ？」

「「えっ」」　キッチンが北極に転送されたかの様に、空気も身体も、一瞬にして凍りつく。
「俺も同じ従業員なんだが、そうやって無視するのはよくないんじゃないか？」
　赤橋は右手に缶コーヒーを持って、ニヤニヤしながらキッチンに入ってきた。喫茶店の店員が、自販機のコーヒーを飲んでいるのはおかしい気がするが、赤橋には似合っていた。
「チーフ、そんなキャラでしたっけ……大人しくキッチンで店長と

新作料理でも研究してて下さいよっ」　彩島はほっぺたを膨らませて、鬼チーフである赤橋に堂々と文句を言った。
「彩島っ、お前こそ上司にそんな事を言うキャラだったか？　昨日の一件もそうだが、これは店長に報告して、店の要会議事項にしないといけないみたいだな」

赤橋の手に握られたスチール缶が変形する。
佑介は、キッチンで急に勃発した彩島×赤橋戦争の、真ん中にポジションを取っていた。
「二海君もチーフに言ってやってよ、店長とよろしくして来て下さいって！」
「二海、お前分かってるよな。ここではどちらに付いているのか正しいのかって事をよ！」

左右から睨まれる佑介は、何なんだこれ！　と心の中で何度も唱えた。

「何だか楽しそうな事をしているね？　私も混ぜてもらえないだろうか」
そして最後に、『喫茶加藤』の主、優貴菜と拓朗の父親である、加藤拓昌（かとう・たくまさ）が現れた。もう佑介はこの異常事態をどうしたらいいのかわからなかった。

「てっ、店長！　まだ客は来ていないんで、休んでてください！」
赤橋は拓昌に近寄ると、身体の調子を心配した。拓昌は腰が弱く、客のいない間はできるだけ、腰を休めるようにしている。
「いやいや、優貴菜がいた頃の賑やかな店を思い出してな、ちょっと顔を出したくなっただけなんだがね、赤橋君は相変わらず私の事

を年寄り扱いしすぎるね」
拓昌は赤橋の肩をぽんと叩いた。しかし赤橋の不安そうな顔は、変わらなかった。
佑介は、赤橋のそんな表情を見たことが無く、少しだけ赤橋の印象が変わっていた。

すると、ホールからカラカラーンという鐘の音がした。
この鐘は入り口が開いた時に音がする様になっている。

「おっと、ちょうどお客様が来てしまったようだね。じゃあ、みんな、午後もよろしくお願いしますよ？」　店長は全員の顔を見回して、にこやかな表情を浮かべた。
全員が、よろしくお願いします、と声をあげた。
「二海、お前朝は調子よかったが、午後はそういくとは限らない。気を抜かずに、しっかりやれよ？」
そう言って拓昌と赤橋は、冷蔵庫にある昼食用の材料を取りに向かった。
「はい。わかりました」　佑介は、今の言葉が赤橋なりの応援なのではないかと思った。

「全く素直じゃないよね。じゃあホール組みの私達も行きますか！」
彩島は右腕を折り曲げて、力こぶを作る真似をした。
「何か彩島先輩、今日楽しそうですね！　何かいい事あったんですか？」
楽しそうな人といると、何故か楽しくなってくる効果（？）が作用して、佑介は理由も無く楽しい気分になっていた。
「そう？　うーん、受験勉強から離れてるからだよ。あっ、口に出したらまた思い出しちゃった……うぇ……」　彩島は口に手を当ててしゃがみこんだ。

「ごめんなさい、思い出させてしまって！　じゃあオーダーとって来ます！」
「いってらっしゃーい……がんばってね～」　彩島は手を振った。
急に静かになったキッチンに残された彩島は、
「素直じゃないのは、誰なんだろうね……」　と呟いた。

2

早朝の七雲総合病院。
優貴菜がいつも通り朝の挨拶をしに、莉子の病室に入った時に、事件は起こった。
「莉子あなた、昨日結局着替えなかったの？」
病室に入った優貴菜を出迎えたのは、昨夜着た私服姿の莉子だった。
「おはようございます優貴菜さん。昨日の夜一応パジャマ着たんです。でもまた着替えました」
いつもの様な明るさが無いと、優貴菜は思った。昨日の事が相当効いている、そう思うと、佑介の事が頭に浮かぶ。約束を守らなかった、あの馬鹿が。
「でも、今日のこの時間にはさすがに二海君は来ないわよ？　待つのなら夜まで着替えなくても」「いえ、佑介さんを待っている訳じゃないんです。思い出しちゃったんです」
優貴菜の心が止まる。体が凍る。瞳孔が開く。汗が噴き出す。

「え、思い出したって……、何？　約束の事？　昨日の夕飯？」
必死に話の方向をずらそうとする優貴菜。そのまま話を進めたらどうなるのか、想像したくない。優貴菜は引き攣った笑みを浮かべて、莉子に聞いた。

「記憶です。私は自分の記憶を思い出しました。だから、今日、退院させてください」
莉子は無表情ながらも真っ直ぐな表情で、優貴菜を見つめた。
その顔を見て、優貴菜は悟る。
「本当に思い出したのね、いいわ。ちょっと鷲木先生に伝えるから、後で診察室に行きましょう」
「わかりました。ありがとうございます」　莉子は頭を下げる。

優貴菜は、明らかに変わってしまった莉子を見ていられず、そそくさと病室を出て行った。

「そうですか、思い出しましたか」
鷲木は回転椅子をくるりと回す。

「原因は、昨日二海君と外出する約束を、破られた事だと思うんです。
すいません、私が軽率な行動をしたばっかりに……」　頭を下げる優貴菜。
「いえ、別に記憶が戻ることが、絶対的に悪いことになるとは言ってませんよ。
もともとは、記憶を戻すために入院させていた訳ですしね」

鷲木は苦笑いする。

鷲木にとって、この急な展開だけは、あまり望ましいものではないと思っていた。

優貴菜の困りきった表情を見た鷲木は、それを正直に言うことはできない。

「彼女が自殺をするという仮説も、結構突飛だったような気もしますし、はは」

「そうですね。もし自殺するんだったら、起きた瞬間に部屋からいなくなってますもんね」

二人の間に緊張が走る。今すぐにでも莉子がいなくなってしまう様な気がした。

「じゃあ、あの子を呼んできますね」

「優貴菜さん、最後の診察になるかどうかは、私が決めます。ですから、少し落ち着いてくださいよ。加藤さん」

鷲木は優貴菜に向かって、笑みを向けた。

優貴菜はそれを見て、少し肩の力が抜け、

「ありがとうございます。嘘だったら、縛り付けてでも入院させてやりましょうねっ」

そう言うと、優貴菜は診察室を抜けて、莉子の部屋まで駆けていった。

扉を開けると、莉子はきちんとベッドに腰を下ろしていた。

相変わらず無表情なのは変わらない。しかし、部屋にいてくれたことに優貴菜は安堵した。

「じゃあ、行きましょうか」

「はい。お願いします」
二人並んで歩く光景はいつもと一緒だったが、今は二人の間に壁があった。
少しの間で築いた人間関係、信頼関係よりも遥かに強く、高い、壁が。

「良かったわね……記憶思い出して。気分はどう？」
優貴菜は心にもない台詞を吐いた。声が震えそうになるのを、必死にごまかしながら。
「良かったです。それも優貴菜さんのお陰です」
淡々と告げられる言葉に心が締め付けられる感覚。
何かが心臓に巻きついて、それが心臓が鼓動するたびに、締め付けてくる。

（その言葉、昨日の莉子に言われたら、どれだけ嬉しかったんだろう……）

優貴菜は小さく息を吐き出して、気持ちを切り替えるように頬を叩く。
「じゃあ、最後の診察になるかもしれないけど、頑張ってね！」
そう言って優貴菜は扉を開けた。部屋の中には入らない。というより、
入れなかった。
「診察が終わったら、また」　莉子は扉を閉めた。
廊下にが急に無音になる。それはまだ、時間が早いからしょうがない事だ。
でも、今の優貴菜には、その無音こそが一番の重圧になった。
「っう、うっ、うっ……う、うううう……」
張り詰めていた線が切れるように、優貴菜の目から涙が溢れる。

記憶を思い出した事が悲しいんじゃない。
別れなくてはいけないのが悲しいんじゃない。
莉子が変わってしまった事が悲しいんじゃない。

「……私はあの子に……何をしてあげれたんだろう……」
莉子が病院の中にいた時間を、一緒に過ごしていた時間を、私は莉子に楽しく生活させることができただろうか。喜びや、希望を与えてあげれなかった。と優貴菜は思った。
「あんな顔しかできなくなるなんて……何で思い出してしまったのよ……」
頭に浮かぶのは、無表情な莉子の顔。

両手で目を覆う。それでも手からはみ出す程に、溢れ出す涙。
優貴菜の嗚咽が、鼻を啜る音が、病院の廊下に響いていく。それを聞く者はいない。
「そんな記憶、ずっと忘れていれば良かったのに……」

優貴菜は両膝を廊下につけて、少女の様に泣き崩れた。

「おはようございます！　莉子ちゃん？　でしたっけ」
「……、すいません。そのあだ名でもう呼ばないで下さい」
足元に視線を泳がしている莉子は、明らかに嫌悪感を抱いた表情をしている。

鷲木は接近するアプローチとして『莉子』の名前を呼ぶ事を試みたのだったが、それが逆効果を示した事で、記憶復活の事実を認めなければいけないと思った。
「申し訳ありません。もうお名前も思い出されたんですよね？　教

えていただけますか？」

「……は、葉月、麻衣っていいます」

莉子は小さな声で言った。

「麻衣さんでしたか、ではこれからそう呼ばせていただきますね。家族の名前教えてもらえます？」　鷲木は続ける。

「父は、俊介で、母は晴香っていいます」

「なるほどなるほど。では住所は？」

莉子は少し躊躇した。鷲木の診察という行為が、自分を疑っているのではないかと思った。

「先生、もしかして、私が記憶を戻したという事を、嘘だと思っているんですか？」

下を向いていた莉子は、無感情な顔を鷲木に向けた。

鷲木は無感情に見えるその表情の中に、確かな敵意らしきものが向けられている事に気づく。

これ以上詮索しすぎるのは、強い不信感を与えると思った鷲木は、

「いえ、そんな事はないんですが、一応カルテという書類を書かなくてはいけませんから、後、住所と学校の名前を教えてもらったら終わりですよ」

「わかりました。じゃあそれだけ」

その後も、すらすらとはいかないが、自分について語っていく莉子を見て、鷲木は確信する。

莉子は記憶が戻った事。

言っていること全てが本当かどうかはわからないが、自分の意志をしっかりと持った事に。

「ありがとうございます。これで診察は終わりです。一応大事を取って、今日だけでも入院していただいてもいいんですけど、どうし

ましょう」
「今日退院したいんです。すぐにでも……」
莉子の目には強い力が篭っている。鷲木はその視線を真正面からしっかりと受け取った。
何を言われても意見を曲げることはない。
もし邪魔をするというのなら、無理やりにでも退院する。
と、目が語っていた。

「そうですよね。入院しているとお金もかかりますし。あ、治療代については、どうなさいます？　ここに両親を呼んでもらってもいいんですけれど」
「いえ、一度家に帰って、親にお金をもらってきます。心配していると思うので」
目力程の力が言葉には無い。
莉子の言葉には、口篭っているかの様な弱々しさがあった。
「そうですか。じゃあ結果を報告して退院の許可をもらってきますので、病室の方で少々お待ちください」
鷲木は立ち上がって、診察室の扉を開く。部屋の外には優貴菜が待っていた。

「今日までありがとうございます」
莉子は鷲木にそれだけ言って、診察室を出て行った。
ガチャン、と扉が閉まる音が診察室に響く。
ドンッ！　とその音に次いで大きな音が響いた。鷲木だ。
「あれだけ心に響かないありがとうございますは、久しぶりですね」
鷲木は机の上で震える右拳を押さえるように、左手を覆い被せた。
それでもまだ震えている。
「力及ばずっていうのは、歯痒いものです」
鷲木はコップに注いであった、冷め切ったコーヒーをぐっと飲み

干した。

3

「二海くんお疲れ様。今日は本当に完璧だったね！」
彩島ははカウンターに胸押しつける態勢で、佑介に声をかけた。
「そうですか？　もう少し落ち着いて仕事できるようになりたいんですけど」
「結構堂々としてたよ？　とりあえずオーダー一級位はあげてもいいかな？」
彩島はくすくすと笑った。それにつられて佑介も笑う。

「じゃあ次は、カウンター一級ですね」
「今日オーダーの仕事をしっかりとこなしてくれた二海君に、夕飯を振る舞ってあげようか？　さすがに二日連続は嫌かな……」
彩島は机に肩肘をついて、首を傾けている。
その言葉に、佑介は昨夜の事を思い出していた。

約束を完璧なまでに忘れてしまっていた事は、佑介の自分に対する苛立ちを強く持たせていた。自分にとって妹の様な存在の、莉子との大切な約束を。
「ごめんなさい、今日は入院してる子のお見舞いに行く予定なんです」
佑介は手を合わせて謝った。
「二海君が助けた子、まだ入院してたんだ。怪我がひどいの？」
「命に別状はないんですけど、検査がいっぱいあるみたいで、だから心配はいらないんですけど」　佑介は適当な嘘をついて、彩島を

かわした。
深い話はあまりしない方がいいと判断したからだ。
「そっか、じゃあ今日はやめた方がいいね。次カウンターできるようになったら、奢ってあげるよ。今回のはなしね」
彩島はそう言って、休憩室の方に歩いて行った。
（一刻も早く行って、莉子に謝らないと……）
佑介は更衣室で着替えている彩島の事を待ち切れずに、エプロンを外しただけの仕事着のままで店を出た。

急げ急げと、頭の中で連呼する。
電車の中でも落ち着かず、立ったままで七雲駅を待つ。
そして、自然と覚えていた七雲総合病院への道を、最近酷使してばかりの自転車に乗って向かった。
乱暴に自転車を止め、病院の中に入る。
受付の女性に、前と同じ様に面会の許可を取ろうとした。
が、
「その方でしたら、今朝退院されているんですが、本当にその方ですか？」
「え、あの……じゃあ看護婦の加藤さんに会わせて欲しいんですけど」
「加藤ですか？　少々お待ちください」
受付は備え付けの電話で、連絡をしている。
何故、退院しているのか……佑介は頭を何かにかき回される様な

感覚を覚えた。
そう思わせるほどに混乱した。
「加藤なら、二階のナースステーションにいますが、呼びましょうか？」
佑介は少し考えたが、
「……いえ……自分で会いに行きます」　と言った。
「一応、あなたの氏名と住所、電話番号の記入をお願いします」
受付は用紙とボールペンを取り出し、佑介に手渡した。

（――急げ、退院したってどういう事だよ……）

佑介はボールペンを走らせまくり、ほとんど字に見えるかどうかわからない記号を書いて、受付に渡して歩き出した。
ナースステーションに着くと、そこにはいつもと変わらない様子の優貴菜の姿があった。
佑介は、優貴菜を呼ぼうと口を開いたが、その瞬間に、視線の先の優貴菜の顔が、くるっと回り佑介の顔を見た。

「あ、その…」
佑介は優貴菜から送られてくる、棘の生えた視線を感じて、怖じ気ついた。
すたすたと、ナースステーションから優貴菜が出てくる。
「あんた、ちょっと顔を貸しなさいよ」
優貴菜は佑介の目の前を通り過ぎて、最近佑介も看てもらったうた鷲木の診察室に向かった。

扉を開けると、コーヒーを飲んでいる鷲木が回転椅子に座っていた。
「二海君来ましたか。加藤君から昨日の話聞きましたよ？　まあ、そこに座って下さい」

落ち着いた雰囲気で鷲木は言った。
「貴方、とても『何で彼女が退院したんだ』と聞きたがっている顔をしていますね」
鷲木は腕を組んで目を細めた。口元には苦笑いに似た笑みが伺える。
「もう受付で聞かされたとは思いますが、改めて。記憶喪失の少女、貴方達の中では『莉子』と呼ばれていたそうですが、彼女は記憶を取り戻して退院しました」

第四章「ダウン・ライト・ライ」後編

「記憶が戻った……本当ですか？」

佑介は驚きの余り、口が開いたままになっている。

「記憶喪失というものは、その人が記憶が無いと言えば、記憶喪失であり。記憶が戻ったと言えば、それは治ったという事です」

鷲木は淡々とした口調で言った。

「莉子が、記憶が戻ったと言ったっていう事ですか」

「そうです。自分の名前も、住所も、親の名前も、細かいプロフィールまで答えていきました。それが治ったという証明です」

「それで退院させたんですか？　先生が言ったんですよ……一人にしたら危ないんじゃないですか？」　佑介は力強く言った。

「私は、彼女自身が選んだ道を止める事はできません。今までの彼女は、自分の事がわからず、迷っていました。でも、今の彼女は迷わず、退院する事を選んだんですよ」

熱くなっている佑介とは反対に、鷲木は常に冷静だった。

「……何で退院させたんですか……」　その冷静さが、佑介をさらに苛立たせていた。

「貴方は、自分で撒いた種が咲かせた花に文句を言っているという事が、

どうやら分かっていないようですね」

「例えがわかりません。どういう意味なんですか？」

「すいません、私の例えはわかり辛いみたいで。

貴方の昨夜の行動が、今回の件に繋がっているという事を言ったん

です。
わかってもらえました？」
佑介の頭の中で、一つの理由が浮かび上がった。
「理解してもらえたみたいなので、詳しくは触れませんが、
彼女はその事がきっかけとなって記憶を思い出した、そうとしか考えられません。
昨日彼女に起きたきっかけらしき物は、他にありませんからね」
鷲木はやれやれという手振りをした。佑介は自分が原因という言葉にうつむいてしまう。
「今回の事と、過去の事が彼女の中で結び付いた。それによって記憶を取り戻した。
これはかなり妥当性の高い仮説です」
佑介は既に、何も喋れなくなっていた。
自分の失態が原因で、大切な存在が失われてしまうかも知れないからだ。
「治療費も、一度家に帰ってから、こちらに送ってもらえるようです。
よかったですよ、これで病院で小さく隠れるような事はしなくていいですし」
「帰ります。ここにいても意味がないって、わかりましたから」
「そうですか、じゃあお気をつけてお帰り下さい」
何も話さずに入口に立っていた優貴菜が、扉を開く。
「時間を使わせてしまってすいません。失礼します」
佑介は溢れそうになるわだかまりを抑えながら、部屋を出た。
莉子との急な別れは、佑介の心を確実に揺さぶっていた。

できるだけ平静を保つようにして、廊下を歩く。気を抜けば、声を張り上げてしまいそうだ。

「……記憶が戻ったら……用無しかよ……」

（何で俺にできる大切な人は、一人で行ってしまうんだよ……）

拳がきしむ。爪が皮膚にめり込む。

「ちょっと待ちなさいよっ！」

佑介は振り返ると、そこには怒りを露にした優貴菜がいた。

優貴菜は駆け足で佑介の後ろまでやってくると、

「何でっ、何で守れない約束したの！　何であの子との約束守れなかったのよ！」

病院の廊下だという事を気にしないで、優貴菜は気持ちのままに叫んだ。

「……それは……」

佑介は何も言えなかった。

呑気に別の人と夕食を食べていた事など更に言えるはずがない。

昨日の事実を思い出して、更に自分が恥ずかしくなる。

「あの子は君を許すかもしれないけれど、私は許せない。

昨日、記憶が戻ったとか、そんな事はどうでもいいわ。何で来なかったのよ！」

「俺が悪いんです……約束を忘れるなんて、最低だと思います……」

佑介は顔を伏せて震えた。

「わかってるんじゃない。確かに最低だわ。

それに、先生は黙って退院させた訳じゃない。どれだけの事を言っても、あの子は聞いてくれなかったの。それだけ、先生も苦しんでるのよ！」
優貴菜は佑介から顔を背けた。
「そうですよね、先生も莉子のために、とても真剣になってたのを忘れていました……」
佑介は少しだけ冷静になった。
「すいません。さっきから俺は、相当馬鹿なこと言ってますよね」
「そうね。大馬鹿だわ。
君に渡したいものがあるの。ちょっと来て」
そう言って優貴菜は、莉子が今まで入院していた部屋に佑介を案内した。
「これよ」
そこには佑介が莉子に買ってあげた、少女マンガ五冊が、きれいに積まれていた。
「俺、相当嫌われてるみたいですね。プレゼント返されるって」
「そうね。それどうしようもないからさ、持って帰ってよ」
優貴菜に言われるままに、無言で鞄にマンガを詰める。
「じゃあ、これから入院しなけりゃ会うこと無いと思うけど。達者でね」
優貴菜はそう言って、佑介のそばを去った。
「後一つだけ」
優貴菜がもう一度佑介に振り向く。
「今日の莉子は少し変だったわ」
それだけ言って、優貴菜はまた歩き始めた。
「――――帰るか」
佑介は受付に許可証を返して、病院を出た。

心ここに在らずの佑介は、家に向かってゆっくりと自転車をこぎ始めた。

4

家に着いた佑介は、鞄を床に放り投げて、ベッドに横たわった。

「俺の顔を見たくないくらい、嫌われたのかな……」

ごろりと身体を回して、天井を眺める。

自分のした事が許されない事はわかっていた。約束を破るとはそういう事だ。

それでも、

「何も言わずに、去っていく事ないじゃないか……」　枕に顔をうずめる佑介。

ぐぅ

「はは、こんな時でも減るものは減るんだな」

佑介は立ち上がって、キッチンにある炊飯ジャーの蓋を開ける。

当然の様に米粒一つ存在しない。

釜を取り出して、米びつから二合分を測り入れて、蛇口から水を米が浸かる高さまで注いだ。

そして、佑介は力任せに米をかき回した。

「俺の馬鹿やろぉぉぉぉぉぉっ！」

勢いよくぬかを吐き出す白米達が、佑介の手から逃げ出している

かのように、釜から飛び出して、流し台の排水溝の中に吸い込まれていく。
いつもなら慎重に米を研ぐ佑介だが、今の佑介には冷静さが欠片もなかった。
「約束忘れるなんって、どういう頭してんだろうなぁぁぁぁっ！」
目一杯に白くなった水を見て、慌てて手を止め、ゆっくりとした手つきで水を流していく。
流れきったところで、もう一度、水を満たした。

（ちょっと、落ち着かないとな）

佑介は釜に残った米が少し少なかったのを見て、冷静になった。
力任せに暴走しても、何もあなたは掴むことができませんと、神様に言われた気がした。
「よし、終わり」
米を洗い終えた佑介は、ジャーにセットして、スイッチをオンにした。
冷蔵庫を開けた佑介だったが、減っていくだけで何も増えないその中身は、やはり夕飯用の材料など残してはくれていなかった。
「おかずは……カップラーメンでいいか……」
流しの下にある棚から、一つのカップラーメンを取り出して、机の上に置く。
「もうする事ないじゃん」
少しだけ好きな事に入る『料理』をして、気を紛らわせる作戦だったが、米を研ぐだけで、敢え無く終了してしまった。

もう一度同じように身体を横にしようと、ベッドに行こうとしたその時、

佑介はある事を閃いた。

「漫画、莉子にあげた漫画でも読むか」

床で横になっている鞄を持ち上げ、中に入っている漫画「トライアングル」の一巻を取り出す。莉子は丁寧に読んでいたのか、その見た目は新品そのものだった。

「確か、面白いって言ってたよな」

ベッドに横になって、ページを繰る。ご飯が炊けるまでの、少しの時間つぶしにはなるだろう。佑介はそう思っていた。

「なかなか面白いな」

一巻を早々と読み終わり、次の巻に進む。

少女漫画という事を忘れさせるような洗礼されたストーリーに、様々な障害、恋を叶えていく過程、挫折、色々な要素が、読者を飽きさせる事無く、話を進めていく。

いつの間にか、米が炊き終わった事を告げるタイマーが鳴っていても気づかないほどに、

佑介はその漫画に没頭していた。

「もう六時半か……」

四巻まで読み終えたところで、佑介の意識が漫画からやっと開放された。

その理由は、外からなにやら雨らしき音が聞こえてきたからだ。ベランダを見ると、雨が小ぶりだが降っていた。干してあった洗濯物を取り込んで、かごの中に無造作に詰めていく。後で畳む為のかごだが、佑介はここからそのまま着ることが多い。

「ジャーもいつの間にか、タイマー鳴ってたんだな」

ジャーは炊飯モードから、保温モードになっていた。
「とりあえず……最後読んでからにしよう」
佑介は先ほどの空腹を忘れた様で、鞄から買ってあった最後の巻である五巻を取り出した。

佑介はわくわくしながらページを開く、すると、
――――一枚の紙切れが佑介の額に落ちた。
「栞か？　漫画に栞って珍しいな、それに大きさが大きいような……」
額に手を伸ばし、目の前に持ってくる。
そこには、何の絵柄も無い、花が圧してあるわけでもない、ただ小さくか弱い字が一面に書き込まれた、手紙だった。
「これ、もしかして莉子がっ！」
佑介は慌てて飛び起きると、その手紙を目の前に引き寄せた。
手紙にはこう書いてあった。

『佑介さんへ

急なお別れになってしまい申し訳ありません。
佑介さんがこれを読んでいる時、多分私はこの町にいません。

約束守ってくれなかった事は、もう怒ってないので大丈夫です。
何でかというと、それがきっかけで私の記憶が戻ったからです。
でも、記憶が戻るにつれて、私の中で何かが変わっていく感覚が広がっていきました。
記憶を失ってからの私と、記憶を失うまでの私が溶け合っていく様な感じです。

もう一度佑介さんに会いたかったんですけど、その頃には私は別人になってそうで、
そんな自分と会わせたくないから、だから、会わないでおこうと思います。
身勝手でごめんなさい。今までの時間、とても楽しかったです。
何も言わないで行くのがいいと思ったんですけど、

今の私が、この気持ちを忘れないうちに、伝えたかったので、書きました。

佑介さん、あなたの事が好きでした。

会った瞬間から何かを感じてしまうっていうのは、運命っていうんでしょうか。
それから、私の友達になってくれたり、一緒に花を見たり、
いなくなった私を探してくれたり、ご飯を食べる約束をしてくれたり、
全部嬉しかったです。全部大切な思い出です。
でも、私が変わったら、その思い出も嫌なものに変わってしまうんじゃないかと思うと、
凄く、怖いです。

だから、佑介さんが好きな私はこの手紙に残して、私は消えます。
今までありがとうございます。

さよなら

莉子』

読みながら佑介は、自然と目尻に涙を浮かべていた。

読み終わった佑介は、ベッドから勢いよく立ち上がる。窓から外を見ると、外はどしゃぶりの大雨になっていた。

「そんな事気にするなんて、お前は何でそんなに、そんなに……」

危うく、右手に握っていた手紙を握りつぶしそうになる。

佑介は、莉子の事を諦め切れなかった。こんな形での別れになってしまった事が悔しい。もう一回会って、話がしたかった。

しかし、どこをどう探せばいいのだろうか。

この島に来てまだ二年目の佑介が、この町以外に住んでいる少女を、どうやって。

「――――そういえば」

急に今日一日の会話が、佑介の頭を駆け巡り、その中で、鷲木の言葉が引っかかった。

『自分の名前も、住所も、親の名前も、細かいプロフィールまで答えていきました。』

「住所さえわかれば、こっちのもんだ！」

時計を見る。長針は九を指している。

それは後少しで、病院が閉館してしまう事を示していた。それでは駄目だ。今日会わないと。

手紙を机の上に置いて、佑介は玄関に立てかけた傘を持って扉をねじ開けた。

記憶を取り戻した莉子に、拒絶されてもいい。

性格が変わった莉子に、何を言われてもいい。

でも、手紙に書かれた字で、最後の言葉が終わるのは、絶対に嫌だ。

佑介は傘を開いて自転車に跨る。
滑りやすい、雨でぬれた道という事を忘れているかのようなスピードで、
佑介は走り出した。

廊下には受付にいた女性と、警備員に見える男がこちらに向かってきていた。

「あの人です。あの人が、許可証無しに病院に入ってきたんです！」
佑介は受付の女性に指を指された。警備員が佑介に向かって走ってくる。
「待ってくれ、今、あんたに捕まっている場合じゃ……」
「話は後で聞かせてもらいましょう」
佑介は必死でかわそうとしたが、警備員は目の前で逃げ出そうとする侵入者を捕らえること等、容易かった。

その結果、佑介は警備員に廊下に組み伏されることになった。

「今、俺が行かないと、駄目なんだよ……お願いだから、離してくれ」
「すいませんが、話を聞かせてもらうまでは帰せませ」「ちょっと待ったッ！」
鷲木が診察室から出てきて、警備員に呼びかけた。
「この方を離してはもらえませんか？　事情なら私が話しますので、どうか」
鷲木は平謝りするかの様に、頭を何度も下げた。

受付の女性は、鷲木に押されるがままに、
「そうですか、先生がそう仰るなら、すいません。警備員さん離してもらえますか？」
「そう仰るなら」　そう言って、佑介は開放された。
「貴方は何かを知っている様ですね。今は聞きません、何故名前を知っていたのか、後で教えていただけませんか？　それで、今は良しとします」

「すいません、必ず後で先生に話に来ます。今はすいませんっ！」
佑介はもう一度、廊下を駆け出した。
佑介が何故、聞いたことの無い莉子の本名や、莉子の親の名前を言うことができたか。
それは簡単な理由だった。

「あいつ、何も思いつかなかったからって、漫画のキャラクターの名前、そのまま使うこと無いだろうが！」

佑介は玄関を飛び出して、自転車に跨る。
莉子はまだ、完璧には記憶が戻っていない。
だからこそ、今も、この島から出られずに、どこかを彷徨っているに違いない。
「待ってろよ、莉子。絶対に、探し出してやるからっ！」

佑介は玄関に置いた傘の存在を忘れて、土砂降りの雨の中を走っていった。

廊下には受付にいた女性と、警備員に見える男がこちらに向かってきていた。

「あの人です。あの人が、許可証無しに病院に入ってきたんです！」
佑介は受付の女性に指を指された。警備員が佑介に向かって走ってくる。
「待ってくれ、今、あんたに捕まっている場合じゃ……」
「話は後で聞かせてもらいましょう」
佑介は必死でかわそうとしたが、警備員は目の前で逃げ出そうとする侵入者を捕らえること等、容易かった。

その結果、佑介は警備員に廊下に組み伏されることになった。
「今、俺が行かないと、駄目なんだよ……お願いだから、離してくれ」
「すいませんが、話を聞かせてもらうまでは帰せませ」「ちょっと待ったッ！」
鷲木が診察室から出てきて、警備員に呼びかけた。
「この方を離してはもらえませんか？　事情なら私が話しますので、どうか」
鷲木は平謝りするかの様に、頭を何度も下げた。

受付の女性は、鷲木に押されるがままに、
「そうですか、先生がそう仰るなら、すいません。警備員さん離してもらえますか？」
「そう仰るなら」　そう言って、佑介は開放された。
「貴方は何かを知っている様ですね。今は聞きません、何故名前を知っていたのか、後で教えていただけませんか？　それで、今は良しとします」

「すいません、必ず後で先生に話に来ます。今はすいませんっ！」
佑介はもう一度、廊下を駆け出した。

佑介が何故、聞いたことの無い莉子の本名や、莉子の親の名前を言うことができたか。
それは簡単な理由だった。
「あいつ、何も思いつかなかったからって、漫画のキャラクターの名前、そのまま使うこと無いだろうが！」
佑介は玄関を飛び出して、自転車に跨る。
莉子はまだ、完璧には記憶が戻っていない。
だからこそ、今も、この島から出られずに、どこかを彷徨っているに違いない。
「待ってろよ、莉子。絶対に、探し出してやるからっ！」
佑介は玄関に置いた傘の存在を忘れて、土砂降りの雨の中を走っていった。

5

（とりあえず、駅に向かおう）
記憶が完璧に戻っていないという事は、多分この町が島の中にあるという事も知らないという事だ。歩いては帰れないし、海を渡るには飛行機か、船の二択。どちらにもお金がかかるから、普通の方法じゃ帰ることができない。
だから、この乙部島からは出ていない。これは事実。
そして、帰る方法がわからなくて一番に行くと思われる場所が、大きな駅。

つまり、初めて莉子と会った伊野部駅に現れる可能性が高いという推理だった。
駅前には、傘を差したサラリーマンと学生が、土砂降りの中を必死に家に帰ろうとしていた。その中に莉子が紛れていないか、必死で顔を巡らせる。

佑介は、人ごみを縫うように自転車を走らせ、何とか七雲駅に着くことができた。傘無しで通り過ぎていく佑介を、サラリーマン達は正気か？　という顔で振り返る。
「そういえば、莉子と初めて会ったときも、急いで駅に向かってたっけ……」
そんな事を思い出しながら、佑介は駅の中に入っていった。
佑介の仕事着はたっぷりと水を吸い込んでいて、絞れば水がどばどば出てきた。

「このままじゃ、風邪ひくな……俺……」
ズボンはシャツより水を吸っていないが、絞ることが出来ない為気持ちが悪い。このまま銭湯とかがあったら、入ってしまいたいと、佑介は思う。
「莉子も、濡れてるかもしれないんだよな……早く見つけないと」
電車から人が溢れてくる。その中にいるかもしれない莉子を見逃さないように、しっかりと目を凝らしておく。しかし、いなかった。

電車に乗り込んで扉の近くを陣取った佑介は、夏休み初日同様、一緒に電車に乗っている客にちらちらと見られる。しかし、ずぶ濡れの佑介はしょうがないと思った。
佑介は出来るだけその視線を無視しながら、一緒の電車に莉子が乗っていないか探す。
しかし、いない。

（早く着け、早く着け、早く）

伊野部駅から降りた佑介は、左右に顔を巡らせながら、改札口に向かった。

駅員に、莉子に似た人が改札を通っていないか、確認しようと佑介は思った。

「すいませんっ！　この改札に、旅行鞄を持った中学二、三年の女の子が、通りませんでしたか？　黒髪が肩まで伸びてて、センターで分けてて、」

「お客さんちょっと待ってください……急にそんな事言われてもね。ここを一日何人の人達が通ると思ってるんですか」

改札にいた駅員は戸惑いの声をあげた。そんな事俺もわかってるよ、と佑介は思った。

「ここ数時間だけでもいいんで、思い出せませんか？　お願いします！」

「うーん、ここ数時間ね～。君が言った子の特徴なんて結構どこにでもいる様な気がするんだけど――――ほら、そこで座ってる子だって、そうじゃないかっ」

「……そこで？」

佑介が振り向いた先、

改札を出てすぐの壁に、

もたれかかった少女、

それは間違いなく、

「莉子ッ！　おいっ、俺だ、佑介だ――――――！」

改札を出て駆けつけようとする。

が、反対側から大量の人が押し寄せてきたため、通ることが出来ない。

人がいなくなって、さっき莉子がもたれかかっていた壁を見ると、

そこに莉子の姿は無かった。
目を左右に泳がすと、駅の出口に向かう方向に莉子は走っていた。
「何で、逃げるんだよっ！」
佑介は改札に切符を通して、莉子を追いかける。
莉子の足は予想外に速く、距離は全然縮まらない。むしろ服が重いせいで、どんどん差がついてしまっていた。
「絶対に運動部に所属してるだろ、あいつッ……」
とうとう莉子は駅を出てしまい、佑介もそれに続いて、土砂降りの中に身を投じた。
佑介は走っているうちに、いつの間にか『加藤食堂』の方に来ていることに気がついた。
よく見ると、目の前には莉子が前事故に遭いそうになった場所があった。

「くそっ……その場所には……いかせないぞっ！」
佑介は最後の力を振り絞って、段々と加速していく。
五メートル、三メートル、一メートル、
「つかまえたっ！」
佑介は莉子が抱える鞄のストラップを掴み、引き寄せた。
「やめてくださいっ、何で追いかけてきたんですか……」
「莉子こそ、何で逃げたんだよ。別に逃げなくてもよかっただろ……」
雨に打たれる二人は、お互いの顔が見えない位に濡れて、服はこれ以上水を吸わない位になっていた。

「手紙に書きましたよね、もう会いたくないって、だから……もうやめて……」
「何も変わってないじゃないか、手紙の通りだと、莉子は変わっている筈だったんだろ？」
「変わってるんです。だからもう、私と話さないで……」
莉子は顔を背ける。

「何でだよ。俺は大丈夫だから」　佑介は穏やかな声を心がけて言った。
「大丈夫なんて、何でわかるんだよッ！
お前、私の何を知ってるんだよッ！」

佑介の表情が固まる。
佑介の顔を睨みつける莉子の表情は、いままで見たことの無い、怒りに満ちた表情だった。
眉毛の端と、目尻が釣り上がった莉子は、佑介の顔を睨みつけていた。

「お、お前って、言ったのか？」
佑介は唖然としていた。
「――――言ったよ。言葉が汚いだろ？　これが私の喋り方だったんだ」
「……汚いとかはないけど、普通に喋れていたのは、我慢していたのか？」
「我慢してた。自分の事思い出してからは、丁寧に喋るのが辛かった」
莉子の表情は力を無くして、肩からずり落ちる様に鞄が地面に落ちた。
「今の私を、お前に見せたくないんだ。記憶が戻った私は、見て欲しくないんだ」

「どういう意味だよ……」

「私、思い出したんだ。家族は私の事を、大切だなんて思ってなかった。

家で私は、父親に無視されて、母親も私から逃げてたんだよ」

「それが、どうしたんだよ！

俺は莉子が家族から思われてなかったからって、嫌ったりなんかしない。友達だ！」

「昨日嘘ついたじゃないかッ！　家族と一緒で、あいつらもお前も私を放っておいたんだ」

莉子は鞄を持ち上げて、どこかに行こうとする。

「じゃあ、これからどこに行くんだよ！　居場所はどこにもないんじゃないか……」

「どこでもいいじゃないか。お前には関係ない」

「関係なくなんてない、大切な友達を放っておけない！」

莉子の動きが止まる。鞄がまた莉子の手から落ちた。

「大切なんて、聞きたく、ないよぉぉぉぉぉっ」

しゃがむ様にその場に座り込む莉子。声が鼻声になっている。

「昨日は、本当にごめん……これからは絶対に、お前との約束を守るから」

「……私は、信じたい、けど、裏切ったのはお前だぁぁぁぁっ」

急に立ち上がり、佑介の襟を掴んだ。

「謝る。何度だって謝る、だからっ、まだ、俺を信じて欲しいんだ……

まだ、莉子との関係を無くしたくないんだよっ！」

佑介は、莉子の肩を掴んだ。

「……何でそこまで私にこだわるんだ……死んだ妹の、代わりかよ……」

言われた佑介は、動揺して肩を掴む力が少し弱まる。それが莉子にもわかった。
「やっぱりそうだ。勝手に死んだ妹を重ねて、それを求めてるだけじゃないか……」
「……そうかも知れない。俺は妹の代わりが欲しいのかも知れない。でも莉子だって、家族の代わりが欲しかったんじゃないのかよっ、違うのか？」

莉子は泣きそうな顔を佑介に向けた。
必死に涙を我慢している、佑介にはそう見えた。
目を潤ませるその顔を見て、莉子という人間は、何も変わっていないんだと思った。

「何も変わっていない、莉子は莉子だ。俺は莉子と、もっと一緒にいたい」
「私は……私も……お前と一緒に……いたいんだよ……」
佑介は莉子の頭を腕で抱きしめた。

莉子は幼児のような声で、佑介の耳元で散々泣き喚いた。

エピローグ「ビー・マイ・ファミリー」

エピローグ　ビー・マイ・ファミリー

「とりあえず、家に来いよ。病院には大嘘ついたんだから、帰れないだろ？」
佑介は莉子を駅までおんぶしていき、旅行鞄に入っているかろうじて少ししか濡れていない服に、トイレで着替えるように言った。
ずぶ濡れの佑介は、一刻も早く家に帰りたかった。
「お前の家、誰もいないのか？　私を連れて帰ったら、怪しくないか？」
「俺一人暮らしだから、家には俺一人しかいないんだけど」

「一人……お前変な事考えてないよな」
莉子は上目遣いで佑介を見る。その上目遣いが睨みに変わっている事が、少し今までと違う。
「信用してくれよ。部屋はもう一つあるし、金は持ってないんだろ？風呂に入らないと、絶対に風邪引くぞ。しかも病院に行けないから、悪化して死ぬかもしれないんだぞ？」
莉子は少し考えた後、
「わかった。とりあえず、信用するから。早く、家に連れて行って」
莉子は寒いのか、小刻みに震えている。

「そうだな、このままじゃ俺も風邪を引く……」
佑介は二人分の切符を買って、電車に乗り込んだ。
「お金の事はごめん、今は一銭も持ってないんだよ」
「わかってるよ、そんな事位。だからここにまだいたんだろ？」
こくりと頷く莉子。

「そういえばさ、莉子お前、自分の名前を少女マンガのキャラから取っただろ」
「聞いたのかっ？　確かに、漫画から取ったけど、それがどうかしたのかよ……」
「いや、だから莉子が記憶が完全じゃないって、嘘をついているってわかったんだよ」
「そっか。そのせいで捕まってしまったって訳ね」
莉子は電車の窓から、外の風景を見ている。雨は段々と止んできているようだ。

「それと、俺の事をお前って呼ぶのやめないか？　一応年上なんだけど」
「――――じゃあ、佑介はどうだ？　さんとか君とか、付けたくないんだけど」
「まあいっか、なんかその方が家族っぽいし……」
「誰が家族だ……誰が……」
莉子はそっぽを向いた。佑介はその姿を見て、くすっと笑う。

そうして、佑介と莉子は二人で帰路についた。
七雲駅に着いた頃には雨は完璧にあがっていて、曇り空が晴れた空は月の光が眩しい。
自転車の後ろに莉子を乗せて、佑介は軽快に自転車を走らせる。
莉子は最後まで拒んで、佑介の胴に腕を回そうとしなかったが、服の裾を持つ事で手を打った。
「結局、莉子はどうして事故に遭いそうになったか、思い出したのか？」
「思い出してない。思い出したのは、昔の事ばっかりで、結局、家も、親の名前も、自分の名前も、何で事故に遭いそうになったのかも、思い出してない」

「そっか。まあ、ゆっくり思い出せばいいさ」

「でも、一つだけ大切なことを思い出したんだ」

莉子の声が少しだけ明るくなったと、佑介は感じた。

「何を？」

莉子は小さく息を吸って、心に一つだけ灯っている暖かいものを、ゆっくりと吐き出した。

「私は、大切なものを探していたって事……」

「えっ？　聞こえなかったんだけど、もう一回！」

「駄目だ。もう言わない。二度と言わないよっ！」

莉子の楽しそうな声が、ひっそりとした夜の街に高々と響き渡った。

エピローグ「ビー・マイ・ファミリー」（後書き）

これで、アムネシアのリコは完結します。
続きを書くのは、まだ大分後になりそうですが、いつか、書きたくなったときに書きたいと思います。

ここまで読んでくれた皆様、ありがとうございます！
この作品は一ヶ月を目標にして書いた作品で、何とか、目標どおりに書くことができました。

中身は最初の想定から、大分外れているんですが、プロットだけは変えないで、何とか終わらせることができました。

作品を完結できたのは、この作品が初めてです。

感想、批評、批判諸々ありましたら、ご自由にお願いします。

では、また次の作品で、お会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4495e/

アムネシアのリコ

2010年10月10日04時10分発行